

OCCUPATIONAL SCIENCE SEMINAR



作業科学と

Occupational Science &

リーダーシップ

Leadership

目次

参加にあたってのお願い(必ずお読み下さい).....	3
会場周辺図・アクセス.....	4
会場案内図.....	5
研究会会長挨拶.....	6
実行委員長挨拶.....	7
プログラム.....	9
教育講演.....	11
佐藤剛記念講演.....	14
特別講演.....	18
基調講演.....	22
特別セミナー.....	26
ワークショップ.....	28
口述発表Ⅰ 演題抄録.....	34
ポスター発表 演題抄録.....	42
口述発表Ⅱ 演題抄録.....	70
懇親会のご案内.....	75
ランチマップ.....	76

Contents

General Information	3
Around the Campus Guide Map & Access	4
Floor map	5
Research Chairman greeting	6
Chairman of the Executive Committee greeting	7
Program	9
Educational Lecture	11
Tsuyoshi Sato Memorial Lecture	14
Special lecture	18
Keynote lecture	22
Special Seminar	26
Workshop	28
Abstract presentation program	30
Oral Presentations I Abstracts	34
Poster Presentations Abstracts	42
Oral Presentations II Abstracts	70
Get-together Party	75
Lunch map	76

参加にあたってのお願い

1. 日本作業科学研究会入会・年会費受付

- ・新規会員登録，年会費などの受付は，「日本作業科学研究会受付」（会場案内図参照）で行います。

2. 日本作業科学研究会総会のお知らせ

日時：2014年11月15日（土）12：00～

会場：YIC リハビリテーション大学校（講堂）

対象者：日本作業科学研究会会員

※総会終了後にも昼食の時間を確保しております。

会員の方は，ご参加いただきますよう，よろしくお願い致します。

3. 昼食について

- ・お弁当引き換えについて

事前登録の際にお弁当を申し込まれた方は，受付の際に交換チケットをお受け取り下さい。

交換チケットにより，お弁当の引渡しとなります。

お弁当引渡し場所：YIC リハビリテーション大学校

引渡し時間：11：50～

- ・当日，昼食を購入される方は，会場周辺にスーパーや飲食できる場所がございます。
ランチマップをご参照下さい。

4. ゴミについて

- ・ゴミ箱は昼食会場，講堂出入口に設置してあります。
（ペットボトル、缶は1階学生ホールのゴミ箱をご利用ください）
- ・お弁当の空き箱に関しては，回収場所を設けておりますので，ご利用下さい。

5. クロークについて

場 所：1階応接室1

利用時間：11月15日（土）8：15～18：30（懇親会参加者 20：40 まで）

11月16日（日）8：30～13：10

※受付を済ませてからご利用ください。ご利用はお手荷物に限らせていただきます。貴重品，生もの，パソコンなどの機器はお預かりすることができません。

6. その他

- ・会場までのアクセスに関しましては，会場周辺図のアクセス方法をご覧ください。
- ・会場敷地内は全面禁煙となっております。ご協力下さい。

会場周辺図・アクセス

専門学校YICリハビリテーション大学校

〒759-0208 山口県宇部市西宇部南 4-11-1

TEL 0836-45-1000(代表)

FAX 0836-45-1135(教員室)



新幹線・電車でお越しの方

最寄り駅

■JR 山陽本線 宇部駅から徒歩 3 分

- ・小倉駅→宇部駅 約 60 分
- ・下関駅→宇部駅 約 50 分
- ・山口駅→宇部駅 約 45 分
- ・厚狭駅→宇部駅 約 10 分
- ・新山口駅→宇部駅 約 25 分
- ・徳山駅→宇部駅 約 80 分
- ・宇部新川駅→宇部駅

宇部線約 12 分

小野田線約 33 分

※小倉駅・山口駅・新山口駅・徳山駅

発はそれぞれ乗り換えあり。

※小野田線は乗り換えあり。

飛行機でお越しの方

- ・山口宇部空港より車で 20 分
- ・山口宇部空港より連絡バス(急行)で宇部新川駅まで 15 分
- 宇部新川駅より路線バス(西宇部厚東線 宇部駅・木田方面)にて宇部駅まで約 25 分
- 宇部新川駅より JR 小野田線にて宇部駅まで約 30 分
- 宇部新川駅より JR 宇部線にて宇部駅まで約 12 分

車でお越しの方

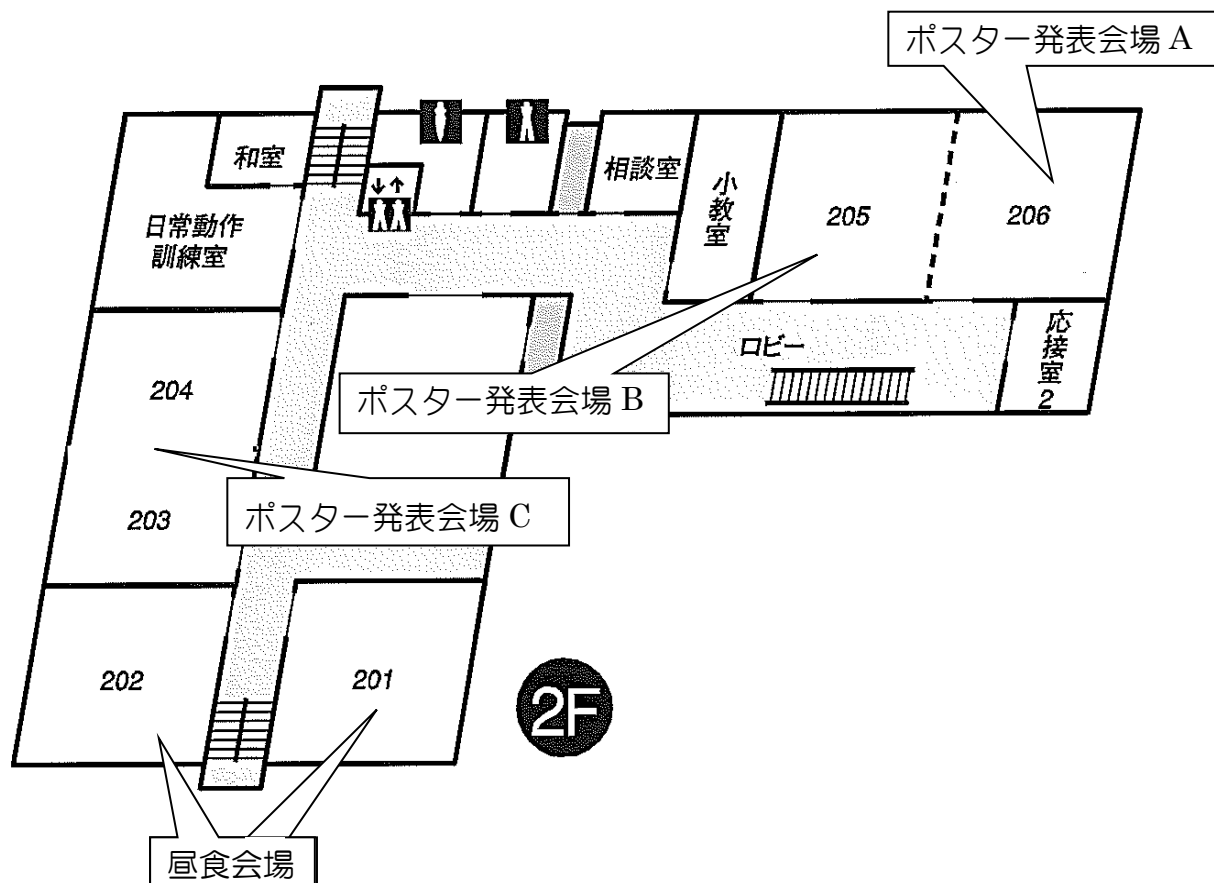
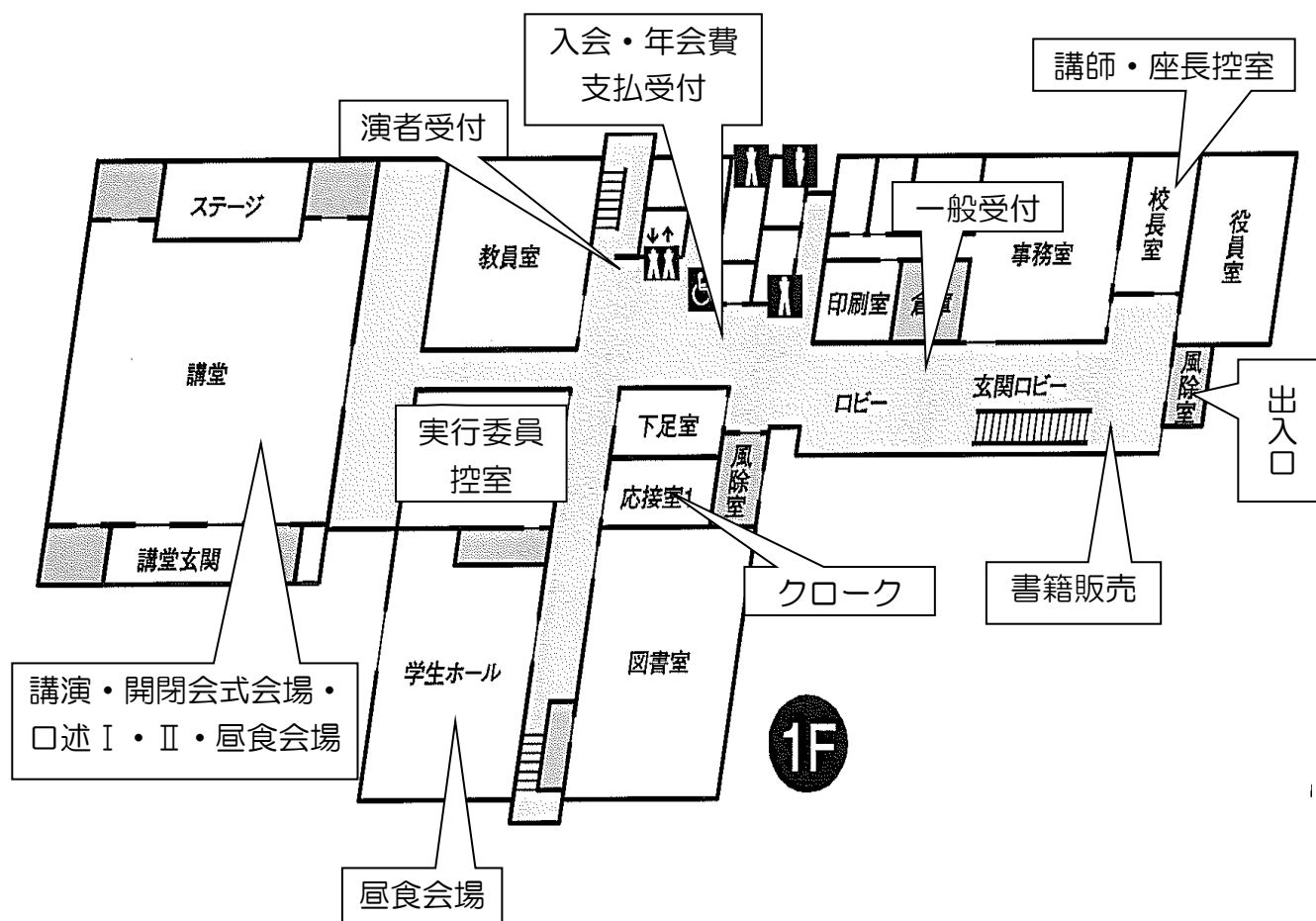
- ・九州・下関方面より ⇒小野田 I.C. 下車

※宇部 I.C. まで行くと

会場までは遠回りとなります。ご注意ください

- ・広島方面より ⇒山口南 I.C. 下車

会場案内図



研究会会長挨拶



日本作業科学研究会会長

President Japanese Society for Study of Occupation

港 美雪

Miyuki Minato

作業科学研究会は、年に一度、全国各地の実行委員による主体的で個性的な企画により作業科学セミナーを開催しています。今年度は、山口県の実行委員の皆様による素晴らしい企画と準備を経て、第 18 回作業科学セミナー開催の運びとなりました。

さて、作業科学の研究成果は、様々な方向に影響を広げています。2006 年、WFOT（世界作業療法士連盟）は、作業的権利と公正に関する考えや社会的な行動に関する戦略について声明書を通して明らかにしました。また同連盟は、2012 年、作業療法にとっての作業科学の価値を認め、作業科学の発展をサポートしていく考えを表明しました。作業科学の研究への取組によって、作業の可能性を大きく阻む社会的な問題をどのように明らかにし、その解決に向けてどのような戦略を練ることができるのでしょうか。本セミナーにおきましても、特別セミナーとして社会的入院と病院内退院という社会的な問題について情報を共有し、意味ある作業を通じた参加促進と、作業的権利と公正からこの問題を考える機会を設け、行動戦略について意見交換を深めます。

作業科学セミナーは、年に一度の、作業科学を存分に味わい、そして共有する機会です。第 18 回作業科学セミナーに、ぜひ多くの皆様に参加していただけますことを心よりお待ちしております。

The Japanese Society for Study of Occupation (JSSO) holds the Occupational Science Seminar once a year planned and convened by the regional executive committee members. This year, the executive committee members of Yamaguchi Prefecture made it possible through their creative planning and preparation to achieve this 18th Occupational Science Seminar.

Researches on occupational science have expanded the impact in various ways. Recently, WFOT has clearly issued a statement regarding the strategy for social action, thinking about justice and occupational rights. WFOT also expressed that they recognize the value of occupational science of occupational therapy, to support the development of occupational science. Through tackling various studies on occupational science, how can we solve our societal problems that block the great potential of occupation and, how will we be able to make a strategic plan towards its resolution? In this seminar, we share information about the social problems such as social hospitalization and “residences inside hospital” as a special topic. By having the opportunity to think about this problem, I hope the participants will deepen their knowledge through the exchange of opinions on the possible action strategies.

I look forward to welcoming many participants to the 18th Occupational Science Seminar in Yamaguchi.

(愛知医療学院短期大学 教授 Professor. Aichi Medical Junior University,)

実行委員長挨拶



第 18 回作業科学セミナー実行委員長

18th Annual Meeting of the Occupational Science Seminar

Chairman of the Executive Committee

渡辺 慎介

Shinsuke Watanabe

青いお空のそこふかく、海の小石のそのように 夜がくるまでしずんでる、
昼のお星はめにみえぬ。 見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

ちってすがれたたんぼぼの、かわらのすきに、だまって、春のくるまでかくれてる、
つよいその根はめにみえぬ。 見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。

この詩は、山口県出身の童謡詩人金子みすゞの「星とたんぼぼ」という詩です。僕の浅はかな知識で解釈することをお許しいただけるのなら、作業科学とは、私たちが普段何気なくしている作業に潜む「見えぬけれどもある、見えぬものでもある」ことを探求する学問であると思っています。ひとの作業の「形態・機能・意味」や「人の作業と健康との関係性」を探求する学問である作業科学。それを学ぶ我々が、クライアント、作業療法士、他職種、広くは一般市民に作業の知識を伝えていくリーダーでありたいという思いを込め、セミナーテーマを「作業科学とリーダーシップ」としました。また、「リーダーシップ」という作業そのものを考える機会として位置付け、伝えることやリーダーシップの形態、意味を皆さんと共に考えていくことも期待しています。

本セミナー開催にあたり、実行委員、日本作業科学研究会理事の皆様にご多大なご協力、ご配慮いただきましたこと厚く御礼申し上げます。また、セミナー広報にご協力いただいた各都道府県士会、日本作業科学研究会会員の皆様、そして、ここ山口までお越しいただいた皆様、全ての方に感謝申し上げます。

日本作業科学研究会の更なるご発展と、皆様のご多幸を祈念しております。

(YIC リハビリテーション大学校)

Chairman of the Executive Committee Greeting

**Deep down in the blue sky Like pebbles on the ocean floor,
They lie submerged till dark comes. Stars unseen in the light of day.
You can't see them, still they're there. Even things not seen are there.**

**Petals drop and withered dandelions Hidden in cracks between roof tiles
Wait silently for spring to come. Their strong roots unseen.
You can't see them, still they're there. Even things not seen are there.**

This poem is a poem called “Stars and Dandelions” poet Misuzu Kaneko of Yamaguchi Prefecture is made. If you're willing to allow to be construed in a shallow knowledge of me, I think Occupational Science is the discipline to explore the “You can't see them, still they're there, Even things not seen are there”.

Occupational Science is the study for explore “the relationship between health and occupational of human” “form, function and meaning” lurking in the occupational that we have been casually.

We have to learn it, The purpose to become a leader for convey the knowledge of occupational to the general public and other occupations and occupational therapists and clients, we decided to "Leadership and Occupational Science" seminar theme.

I hope also that we consider the meaning and form of the work of leadership.

Thank you to Executive committee and JSSO Directors. Thank you everyone told me to cooperate with publicity of the seminar. Everyone who came to Yamaguchi prefecture, I would like to thank everyone.

I pray the best happiness of everyone and your further development of JSSO.

プログラム

11月15日(土)

- 8:15～9:00 受付
- 9:00～9:10 開会式
- 9:10～10:10 教育講演「作業的に豊かな環境を作る」
講師：高木 雅之（県立広島大学）
司会：西方 浩一（文京学院大学）
- 10:10～10:20 休憩
- 10:20～11:50 佐藤剛記念講演「作業科学における場所の再考：トランザクションの視点から」
講師：坂上 真理（札幌医科大学）
司会：渡辺 慎介（YIC リハビリテーション大学校）
- 11:50～13:20 昼食・日本作業科学研究会総会
- 13:20～14:20 口述発表Ⅰ 座長：港 美雪（愛知医療学院短期大学）
- 14:20～14:30 休憩
- 14:30～15:50 特別講演「住まい手の心と身体のための住まいづくり」
講師：坂本 俊久（株式会社 SiZE 代表取締役）
司会：近藤 知子（帝京科学大学）
- 15:50～16:00 休憩
- 16:00～16:30 特別セミナー 「病棟転換問題を考える」
講師：吉川 ひろみ（県立広島大学） 長谷川 利夫（杏林大学）
宮崎 宏興（NPO 法人 いねいぶる） 港 美雪（愛知医療学院短期大学）
- 16:30～16:40 休憩・会場設営
- 16:40～18:10 ワークショップ「リーダーシップという作業を考える」
司会進行：池尻 奈美（介護老人保健施設サンライズ壱岐）
&第18回セミナー実行委員
- 18:40～20:40 懇親会（セミナー会場にて）
- ※18:10 から懇親会開始まで、懇親会参加者は待ち時間を利用してポスター閲覧可能
-

11月16日(日)

- 8:30～9:00 受付
- 9:00～10:00 ポスター発表
司会進行：西野 歩（専門学校社会医学技術学院）
古山 千佳子（県立広島大学）
青山 真美（西九州大学）
- 10:00～10:10 休憩・移動
- 10:10～10:50 口述発表Ⅱ 座長：酒井 ひとみ（関西福祉科学大学）
- 10:50～11:00 休憩・移動
- 11:00～12:30 基調講演「リーダーシップという作業：作業科学と作業療法にとっての契機」
講師：ジョン A ホワイト ジュニア（Pacific University）
司会：小田原 悦子（聖隷クリストファー大学）
- 12:30～12:45 閉会式

Program

Nov. 15 (Sat)

- 8 : 15~9 : 00 Registration
- 9 : 00~9 : 10 Opening Ceremony
- 9 : 10~10 : 10 Educational Lecturer by Masayuki Takagi
 ”Creating an Occupationally Rich Environment”
 Chairperson: Hirokazu Nishikata
- 10 : 10~10 : 20 Break
- 10 : 20~11 : 50 Sato Tsuyoshi Memorial Lecturer by Mari Sakaue,
 Revisiting “Place” in Occupational Science: from a Transactional Perspective
 Chairperson: Shinsuke Watanabe
- 11 : 50~13 : 20 Lunch / General Meeting
- 13 : 20~14 : 20 Oral Presentation I
 Chairperson:Miyuki Minato
- 14 : 20~14 : 30 Break
- 14 : 30~15 : 50 Special Lecturer by Toshihisa Sakamoto (Architect)
 ”Housing for the Mind and Body of End Users”
 Chairperson: Tomoko Kondo
- 15 : 50~16 : 00 Break
- 16 : 00~16 : 30 Special Seminar by Hiromi Yoshikawa, Toshio Hasegawa, Hirooki Miyazaki and Miyuki Minato
 ”Discussion on Transfer Between Units in a Psychiatric Hospital”
- 16 : 30~16 : 40 Break
- 16 : 40~18 : 10 Workshop by Nami Ikejiri and 18th Seminar Committee Members
 ”Giving Thought to Occupation of Leadership”
- 18 : 40~20 : 40 Reception

Nov. 16 (Sun)

- 8 : 30~9 : 00 Registration
- 9 : 00~10 : 00 Poster Presentation
 Moderator: Ayumi Nishino, Chikako Koyama, Mami Aoyama
- 10 : 00~10 : 10 Break
- 10 : 10~10 : 50 Oral Presentation II
 Chairperson:Hitomi Sakai
- 10 : 50~11 : 00 Break
- 11 : 00~12 : 30 Keynote Lecturer by John A. White, Jr.
 ”Leadership as Occupation: Opportunities for Occupational Science and Occupational Therapy”
 Chairperson: Etsuko Odawara
- 12 : 30~12 : 45 Closing Ceremony

～テーマと表紙のイラストに込められた想い～



山口県は吉田松陰を筆頭に明治維新の偉人を多く輩出し、当時の日本をより良くするためにリーダーとなって活躍しました。テーマには、この山口県の歴史的背景に力を借り、私達が作業に関する知識の発信源の一つとなっていきたいという思いが込められています。また、参加者の皆様が作業科学を学ぶことで、作業の知識を深め、それらをクライアント、作業療法士、他職種、広くは一般市民の方々に伝えていくという、「リーダーの役割」を担っていただきたいという願いもあります。

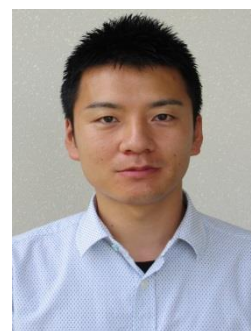
セミナーの実行委員は影から支える存在ですが、まずは実行委員が中心となって（リーダーシップをとって）18 回目の作業科学セミナーを創りあげていくという思いから上記のイラストへなりました。

セミナー終了後は「山口・作業維新の会」が中心となり作業科学のさらなる発展に寄与していけることを願って…。

「作業的に豊かな環境を作る」

高木 雅之

県立広島大学 保健福祉学部 作業療法学科 助教



作業療法士が理想とするのは、作業的に丁度よい社会である。この社会では、すべての人が自分にとって意味のある作業ができる。そして、作業を通して一人ひとりが成長し、社会全体も発展していく。本講演では、理想の社会を創るために、私たちは何ができるかを考えたい。

1. 作業的に丁度よい社会と環境

理想の社会を思い描く背景には、貧困、病気、障害、災害、紛争、差別によって、意味のある作業ができない多くの人々がいるという現実がある。日本においても、例外ではない。人々がどの作業にどのように参加できるかを決定づける重要な要因の1つが、環境である。環境には、道具や家族のような個人的なものから、政策や経済状況といった多くの人々に影響を与えるものまである。理想の社会を思い描くことによって、私たちの環境に対する見方は広がる。理想の社会では、意味のある作業への平等なアクセスに価値が置かれ、多様な形で作業への参加を促進する政策が行われ、作業を行うための手段や資源が充実した環境が必要となる。

2. 理想の社会に向けた取り組み

私は、すべての人が自分の作業ができる環境を創る1つの取り組みとして、2014年4月にものづくり工房「作ら（さくら）」を発足させた。作らの目的は、ものを作りたい誰もがものづくりを楽しめる場所を創ること、参加者がものづくりを通して成長し、地域に貢献することを促進することである。参加者の成長と地域の発展のために、作らの活動には、①誰もが参加できる、②何でも作れる、③学び合う、④作って次につなげる、という4つの特徴がある。活動は、県立広島大学において月に2回、各2時間行われている。

作らの活動は発展し続けており、より多くの住民のものづくりのニーズに答えられるようになってきている。活動を開始した2013年1月では、1回あたりの平均参加者数は13名であったが、参加者の口コミ、地域の行事での宣伝などによって、2014年7月には35名に増加した。参加者の年齢は、20代から80代と幅広く、参加者の中には、退職後の男性、障害のある方、学生、子連れで参加する主婦もいる。作らで行われるものづくりの種類も増え、現在では陶芸、籐細工、木工、木彫、エコクラフト、革細工、マクラメ、編み物、裁縫、パソコン、布ぞうりなどが行われている。また、ものを作るだけでなく、地域の行事で作品を展示・販売したり、地域の子どもたちにもものづくりを教えるといった活動も行われるようになった。

3. 作業的に豊かな環境を創るためにできること

これまでの作らでの活動を振り返り、誰もが意味のある作業ができる環境を創るには、作業ニーズを創造すること、作業の可能化に向けてクライアントと協働すること、成果を明らかにすること、場所や仲間を増やすこと、より大きな力に働きかけることが重要であると感じている。

私たちは、作業的不公正に気付き、行動することで、作業ニーズを創造できる。やってみることで、ニーズが見つかることもある。クライアントと協働を通して、クライアントの作業は可能化される。その成果を明確にし、多くの人にアピールすることで、一緒に作業ができる仲間や場所が増えていく。私たち一人ひとりの小さな取り組みが、大きな力を動かし、社会を変えることができると信じている。

Creating an Occupationally Rich Environment

Masayuki Takagi
Prefectural University of Hiroshima

The occupationally just society is a utopia that occupational therapists imagine. In this society, all people can engage in meaningful occupation. Then they can grow and become healthy, and society can develop through occupation. The goal of this lecture is to think about what we can do individually for the ideal society.

1. Occupationally just society and environment

The reality is that many people cannot participate in meaningful occupation because of poverty, disease, disasters, armed conflict and social discrimination. One of the important factors to determine which occupation people can do and how they can do the occupation is environment. The occupationally just society needs an occupationally rich environment where people value equitable access to participation in occupation, policies promote each person's diverse participation, and instruments and resources for engaging in occupations are provided.

2. Practice for the ideal society

A citizen group, Studio Sakura was established in April, 2014. The aims of the group are creating places where all people who want to make something can enjoy it, and helping participants grow and contribute to the community through making things. The group's activities have four features which promote participants' growth and community development: anyone can participate, participants can make anything, participants mutually learn from each other, and participants move on to the next occupation after making one thing. The group operates twice a month for 2 hours at a time at the Prefectural University of Hiroshima.

The activities of Sakura are developing and responding more to the occupational needs of residents. The average number of participants continues to grow and reached 35 as of July, 2014. The participants' age ranges from their twenties to eighties, and retirees, persons with disabilities, students and housewives with children are included. The kinds of crafts also are increasing, and now participants engage in pottery, canework, woodwork, leatherwork, knitting, sewing and so on. Participants not only make things but also display and sell their products, and teach crafts to children in the community.

3. What we can do to create an occupationally rich environment

Through looking back at Sakura's activities, it is suggested that creating occupational needs, collaboration with clients for enabling occupation, making outcomes clear, increasing places and companions for occupation, and an effective way of communicating with the community were important for creating an occupationally rich environment.

We can create occupational needs by awareness of and action against occupational injustice. Clients' occupations must be enabled through working with them. These outcomes should be made clear and made known to many people. Then we will gain new places and companions for promoting those occupations. I believe that our individually small actions make a difference in society.

【御略歴】

- 2004 年 広島県立保健福祉大学 保健福祉学部 作業療法学科 卒業
社会福祉法人 聖恵会 身体障害者療護施設聖恵 作業療法士
- 2007 年 県立広島大学大学院 総合学術研究科 修士課程 保健福祉学専攻修了
県立広島大学 保健福祉学部 作業療法学科 助教

【Profile】

- 2004 Bachelor in Health Sciences (Occupational Therapy), Hiroshima Prefectural College of Health Sciences
Occupational therapist, SEIKEI Facility for Persons with Physical Disabilities
- 2007 Master of Science in the Program of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima
Assistant professor, Department of Occupational Therapy, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Memo

「作業科学における場所の再考：

トランザクションの視点から」

坂上 真理

札幌医科大学保健医療学部 作業療法学科 准教授



私たちの作業は場所 *place* の中で行われ、その場所によって大きな影響を受けている。場所は時間的な側面とともに、作業の成り立ちに関わる重要な特性である。そのため、作業科学においても作業が行われる場所に着目した研究が数多く報告されてきた。作業科学で場所という概念を扱う場合には、単なる物理的な特徴や地理的な位置だけではなく、そこで作業を行う人々の経験や場所の意味も含めている。より多くの人たちは、ホーム *home* という自分がコントロールできるプライベートな場所を生活の拠点とし、さらに自分にとっての重要な作業と深く結びついた場所を複数もちながら、それぞれ固有の生活を送っている。

ところで日本は今、従来の病院偏重型のシステムから高齢者や障がいのある人々を地域の中で包括的に支えるシステムへと移行する大きな転換期にある。それに伴い、人々の支援を検討する際には、居住、地域生活、生活移行といった言葉が頻繁に取り沙汰されるようになった。これらを理念のままで終わらせ主体者不在の表面的な支援としないためにも、人々の日常の生活を深く理解することが益々重要となっている。このような状況から、人々が本来生活すべき場所とそこでの作業のあり方を研究する作業科学の真価が大きく問われ始めていると言える。

以上を踏まえ、この講演では、作業が営まれる場所、そして作業と場所（もしくは環境）の関係に関するこれまでの作業科学研究を振り返り、私たちが本当の意味で人々の日常生活に近づくための視点を問い直したいと思う。特に、トランザクション *transaction* の視点を取りあげ、作業が営まれる場所を固定化されたモノではなく、作業を通してその形も意味も作り替えられていくコトとして捉えられることの意義を示す。トランザクションは、アメリカの哲学者 Dewey が提唱した人と環境、行為の関係を説明する考え方である。心理学や地理学などでも紹介された後、2000年代以降の作業科学の論文でも取り上げられるようになった。さらに、作業の知識を実践に応用する作業療法でも、それまでの相互作用 *interaction* に代わり、この概念が使われることが多くなっている。そして、トランザクションでは、人と環境を相互に規定しあう「全体」と考え、私たちの日常の作業が連続して営まれていくプロセスを説明している。

作業と場所の関係により敏感となってその知識を蓄積することは、個人の生活を支えることにつながる。さらに、ある人々が本来生きるべき生活環境ではないところで、不公正な作業にさらされているという社会化した問題に対しても、作業科学としての説明力を高め、クライアントや社会に貢献する強力なパワーの1つとなる。この考えを基本に据え、私自身が臨床時代に抱いた疑問から始まった作業と場所の探求について、今後の研究や応用に関する私見も交えて述べようと思う。

Revisiting “Place” in Occupational Science: from a Transactional Perspective

Mari Sakaue

PhD, OTR, Sapporo Medical University

We engage our occupations in places where they are strongly influenced. Place, including its temporal aspect, is an important characteristic related to our occupations. Even though many occupational science studies have addressed and reported about the places where people engage in their occupations, in Occupational science the concept of place not only includes the physical features and or geographical location, but also people’s experiences and meaning of place. Though countless people engage in their occupations at multiple places, many people lead their life at home which typically means that they can control their privacy while engaging in those important occupations. Of note, recently Japan has shifted its medical support structure from a strongly hospital based system to a more community based system in order to comprehensively support elderly and disabled people. Accordingly, terms of residency, community life and a smooth transition from a hospital to a community environment are now, more than ever, necessary when considering how to properly support those persons so that they do not feel that their lives are taken for granted. In these surroundings, in which the study of the occupational nature of people in their real living places, Occupational Science is starting to be put to the test.

Following the tracing of the history of occupational scientific research focused on the place, in which people engage in their occupations and the relationships between place and occupation, I will identify the necessary perspectives relating to place and occupation in an effort to truly understanding real people’s lives. Picking up on the “perspective of transaction”, I will speak to the significance of understanding places not just as static environments but also for the dynamic conditions, which are being recomposed repeatedly through engagement of occupations. Dewey, an American philosopher, and others promoted transaction in order to explain the relationships between person, environment and action. This idea was originally introduced in the psychology and geographic fields but in the 2000’s it began to be dealt with some occupational science papers as well as the occupational therapy field, which applies the knowledge of occupation into it’s practice, starting to use transaction instead of interaction more than it had before. Transaction proposes “the whole”, which is composed of a person and environment co-defining each other, and explains a continuous flow in the unfolding processes of our daily occupations. Some people are exposed to social issues and occupational injustices by living in inappropriate places so the improvement in the identification of those effects, through occupational science, will become a strong device for contributing to people and society. Becoming more sensitive to and understanding of the relationship between occupation and place through study and accumulation of knowledge, we can better support people’s real lives.

Based on this concept, I will discuss my study of occupation and place starting with my experiences when I worked in a clinical setting, followed by my private view with regard to the possibility of future research and it’s real world application.

【御略歴】

1989 年 3 月札幌医科大学衛生短期大学部作業療法学科を卒業後、福島県養生会かしま病院、北海道愛全会老人保健施設で作業療法士として勤務。1997 年に母校に戻り、現在は准教授として勤務する。2007 年には北星学園大学大学院社会福祉学研究科にて社会福祉学博士を取得する。作業科学との出会いは、助手時代の Ruth Zemke 教授と Florence Clark 教授の大学院講義の聴講と、2006 年に文部科学省海外先進教育実践事業の一貫で南カリフォルニア大学にて Well Elderly Study と作業科学講義を視察したことに始まる。研究テーマはケアハウスに入居する高齢女性の転居後の自分らしさ発現過程、老人保健施設における予防的作業療法プログラムの導入の可能性、認知症高齢者の作業とその変容過程の理解である。

【Profile】

Mari Sakaue is an associate professor in the Department of Occupational Therapy of Sapporo Medical University. After working in a hospital for people with physical disabilities as well as two health care facilities for the elderly, she began teaching at her old school of 17 years. As a lecturer, she participated in the graduate program by Dr. Zemke and Dr. Clark at Sapporo Medical University followed by the study of the Well Elderly project and some related graduate lectures at the University of South California; being the place she started to study occupational science. Her research projects: Elderly women developing a “sense of themselves” after relocating to a care home, A preventive occupational therapy program in a geriatric health service facility, and understanding of occupations and their transformation processes for elderly people with dementia. In 2007, she earned her Doctor of Philosophy of Social Welfare at Hokusei Gakuen University.

Memo

「住まい手の心と身体のための住まいづくり」

坂本 俊久

株式会社 SiZE 代表取締役



私は普段、住まい手一人一人にあった戸建住宅の設計を生業としています。具体的には住宅建築という成果物を完成まで導く作業なのですが、実はそのプロセスとして住まい手の心と身体に深く関わり、そのモチベーションキープに貢献する住まいづくりのためには、硬軟様々なテクニックが存在しているのです。今回はその一端をご紹介しますと思います。

まず、現代人はその生涯の実に9割を屋内で暮らすと言われています。そう改めて言われてみると意外な印象を持たれているかも知れませんが、私たちはそれくらい大自然から皮膜で一時的に守られた空間でその生涯のほとんどの時間を過ごしているという事なのです。また、その中でも住まい空間は、睡眠も含めて大半の時間を過ごす場所で、私たちの心と身体に圧倒的な影響を与えていると言っても過言ではないと思われます。戦後の日本は、戦災による住宅不足から数を満たす事で終始してきましたが、近年その質が求められるようになってきているのです。

私に住まいづくりを依頼してくる個々の住まい手には、誕生から育った家庭環境、それまで送られてきた日常という膨大なバックボーンがあります。様々な個性を持った数人の家族が共に暮らす空間で、その要素となる起居様式は建築学の分類では到底分類不可能な多様性がありまさに十人十色といった具合です。私はかなり突っ込んだフォーマットのアンケート調査を事始めに、様々な住まい手のシーンについてのリサーチを行います。そのお打ち合わせの内容は多岐に渡り、時には住まい手が何故そんな事を聴くのかと思われることまで質問します。そうしないと私の中で、その住まい手が活き活きとくらしをシミュレーションしてくれないからです。

住まいの中で行われる行為はこれまた多岐に渡ります。起床から就寝まで、食事、入浴、排便はもとより、調理、洗濯、学習、仕事、娯楽まで、ありとあらゆる事が住まいの中で行われます。そのそれぞれが密接に絡み合い、住まいを構成する「間取り」になってくるのです。玄関ドアをあけたらキッチンのシンクが丸見えであれば興ざめであるし、子ども室をまたいで入らなければならない浴室では困ります。つまり、この関係性を整理して配置していくのが間取りです。住まいの計画はまずこの間取りから始まります。この部分は住まい手の心と大きく関わる部分と言えるかもしれません。

ただ、住まいづくりは間取りだけでは二次元です。現実には空間は三次元。研究によると、人間は普段の起居行動においてはきわめて二次元的に空間認識をし行動を取っているという事が言われています。であれば二次元だけで良いのではないかと言いたいのですが、実は住まいの質はここからが大切な部分なのです。

三次元の要素は、心と身体に大きな影響を与えていきます。高さ、広さ、光の入り方、視線の逃げ口、あるいはアイストップと言われる視線の納まりどころ、そう言う構成が心と身体に知らず知らずのうちに大きく影響していくのです。

長年の住まいづくりの経験から、例えば「飽きのこない空間」とは、そういう部分にになわれているような気がして仕方ありません。住宅実例をお見せしながらその具体例をご説明いたします。知らず知らずのうちに、あなたもご自分の住まいの影響を受けながら、思考し、日常を送っているかもしれません。であれば、よりポジティブに暮らせる住まいに暮らしたいと思いませんか？

House for the Mind and the Body

Toshihisa Sakamoto, President
SiZE Inc.

I normally make living by designing single houses which is suited to each and every individual. Specifically, it's a work to supervise housing construction from the beginning to the finish. As a process, I actually get involved on a personal level with the mental and physical aspects of the end users, and in order to contribute to maintaining the end users' high motivation, a wide range of techniques are required. I would like to introduce one of the examples at this time.

First of all, it is said that a person in this time and age is said to spend 90% of his/her whole life indoors. You may be surprised to hear this, but we are spending almost our entire life in a space protected temporarily by a membrane-like covering from nature. Because this living space is a place where we spend a great portion of our life including sleep, it is not an overstatement to say that it has overwhelming influence on our mind and body. Since postwar Japan, houses were built just to satisfy the shortage in numbers destroyed by the war, but in recent years the demand for higher quality is increasing.

In every person requesting me to produce his or her home, there is a huge backbone that makes up that person's daily life, shaped by the process of growing up from birth to the present within the family environment. A house is a space in which several family members with various individuality live together, and the behavior style is too diverse to be classified by architectural classification. It's just different strokes for different folks. In this regard, I perform research about various lifestyles of end users by asking many questions on personal level at the initial stage. The contents of the hearing are so manifold that the end users will ask occasionally why such questions are necessary. The reason I do this is because if I don't have the information I need, I cannot make simulation in my mind as to the vibrant life the end users can lead in their house.

Things done in a home are also diverse. From the time of waking up in the morning to going to bed at night, people not only attend to their basic needs such as to eat, bathe, and defecate, but they also cook, wash, study, work, and entertain themselves at home, just to mention a few activities among many. These activities taking place in a living quarter are closely entwined and become the basis of a house plan. When a front door is opened and the kitchen sink is the first thing we see, it is quite unattractive, and it would be terrible to go through a child's room to use the bathroom. In other words, the house plan requires arranging rooms in orderly manner, taking account of the room function and relationship to the activity performed in the room. The planning of a house begins from the room arrangement. At this stage of designing the house, the end users' thoughts and feelings are taken into consideration greatly.

However, the room arrangement alone is only in 2 dimensions, but the actual space is 3 dimensional. According to research, it is said that man's usual behavior taken during awakened hours is based on 2-dimension-space awareness. If so, only 2 dimensions are needed, but in fact, the important part of producing high quality housing starts here.

3-dimensional elements have big influence on the mind and the body. Compositions such as height, width, amount of sunlight coming into the house, having an escape route for turning the eyes away or else creating a point where eyes can rest called "ice top" gradually influence the mind and the body greatly without being noticed.

From a long experience of making homes, I feel responsible in creating, for example, "the space people never get tired of." I will explain about this by showing you a concrete example of an actual house. Without being aware of it, you may be thinking about it and spending your daily life while being subject to the influence of your house. If so, wouldn't you want to live in a housing space in which you can live more positively?

Memo

【御略歴】

アーキスタジオ・テン 1 級建築士事務所代表 / 株式会社 SiZE 代表取締役
一般社)パッシブハウスジャパン九州エリアリーダー

1962 年 5 月 大阪生まれの福岡育ち/国立有明工業高等専門学校建築学科卒
京都にて、社寺建築専門会社・設計部勤務の後、帰福。市内設計事務所を経て独立

1989 年 2 月 アーキスタジオ・テン 1 級建築士事務所設立

1995 年 4 月～2006 年 3 月 専門学校において建築デザイン学科・インテリアデザイン学科・
スペースデザイン学科の非常勤講師として後進の育成に従事。

2011 年 11 月 ドイツパッシブ研究所認定の福岡パッシブハウスを KEYARCHTECTS 森みわ代表
と共同設計

2013 年 1 月 ドイツ・オーストリア・イタリアにて、パッシブハウス視察

20 年あまり、高気密・高断熱・計画換気・セントラル空調というテクニックと人体と環境に優し
い素材を使用した住空間の設計が主な仕事。前述のテクニックでは北部九州圏の先駆けのひとり
として設計実例多数。

好きなもの / 本と JAZZ

【Profile】

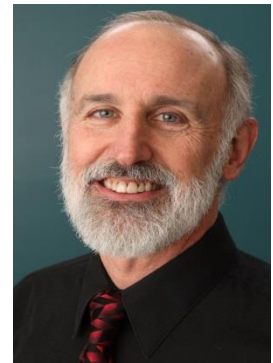
- President, Archie Studio Ten Level 1 Classified Architect Firm / President, SiZE, Inc. / Kyushu Area Leader of General Passive House Japan
- Born in Osaka in May, 1962, grew up in Fukuoka, graduated from Ariake National College of Technology majoring in architecture; worked in Kyoto for a construction company specializing in shrines and temples in their designing department before going back to Fukuoka to work for an architectural designing firm.
- Established Archie Studio Ten Level 1 Classified Architect Firm in February, 1989
- Taught architectural design, interior design, and space design as a part-time instructor at a vocational school from April, 1995 to March, 2006
- Designed Fukuoka Passive House with an authorization from German Passive Research Institute collaboratively with Miwa Mori of KEYARCHTECTS in November, 2011
- Inspected Passive House in Germany, Austria, and Italy January, 2013
- Worked mainly on designing of dwelling space using techniques which are airtight, thermally insulated, planned ventilation, and central air-conditioning, and using human/environment-friendly materials for more than 20 years
- One of the pioneers in the northern part of Kyushu bloc to use above-mentioned technique in large numbers of designs
- Loves reading books and listening to JAZZ

「リーダーシップという作業：

作業科学と作業療法についての契機」

ジョン A ホワイト ジュニア

パシフィック大学 作業療法学部 教授



作業療法という専門職は、その歴史のほとんどの期間、Mary Reilly 博士が 1962 年のエレンア・クラーク・スレーグル講演で話された「作業療法は 20 世紀医療の最高のアイデアの一つになり得る」という作業療法の可能性について、十分認識されることがありませんでした。しかし、今、この専門職は、参加の促進と健康の支持（世界保健機構）を、個人・地域・人々全体に行なう（アメリカ作業療法協会，2014）という重要な役割を持つものとして高く認知されつつあります。特に過去 20 年間に於いて、作業療法が新しい国々に確実に広まったことや、すでに作業療法を取り入れていた国で著しい成長があったことで、この認識は一層高まっています。この 20 年という期間は、Elizabeth Yerxa とその同僚（Yerx, 他，1989; Clark 他，1991）や、それ以外の人々（Wilcock, 1993）が、「21 世紀における作業療法の基盤」として提示した作業科学の発展と平行しています。作業療法や作業科学の成長にあわせ、私達は常に、作業療法が健康や参加を促進し社会に最大限貢献するために何ができるか、作業療法がそれを目指し未来つなげるために気づかなければいけないリーダーシップとはどんなものか、作業科学はこの専門職の成功にどのように貢献するかといった重要な疑問について考え続ける必要があります。

本講演では、これらの疑問に対する現時点での答えが提供されます。White 教授は、自身のリーダーシップの成長に影響を与えた出来事や人について触れ、複雑さと世界性を増す作業療法や作業科学の場でリーダーシップをとるための難しさと挑戦を明らかにし、また、作業としてのリーダーシップの分析を行ないます。言い換えれば、本講演はリーダーシップを作業として捉え、それを人-環境-作業の視点からみて分析するものです。White 教授は、作業療法と作業科学の分野において、変化に調和・統合し発展に結びつけた先駆者達の輪郭を明らかにし、作業療法という専門職と作業の科学の方向性を指し示します。この分析には、機会(opportunity)・責任(commitment)・洞察(vision)・関係性(relationship) といったリーダーシップのテーマを強調する今日の理論や White 教授の個人的経験からの例が含まれます。例示には、作業科学と作業療法・作業的構成・作業療法教育・日々の作業療法実践が相交わる研究や現状についての紹介も含まれます。

Leadership as Occupation:**Opportunities for Occupational Science and Occupational Therapy**

John A. White, Jr.

Pacific University Professor, Department of Occupational Therapy

For much of its history, the profession of occupational therapy has been under-recognized for its potential to achieve what Dr. Mary Reilly proposed in her 1962 Eleanor Clarke Slagle Lecture – that “occupational therapy can be one of the great ideas of 20th century medicine.” However, now the profession is increasingly recognized for the valuable role that it can play in promoting participation and supporting health (World Health Organization) for individuals, communities, and populations (American Occupational Therapy Association, 2014). This recognition has grown significantly in the last two decades, with occupational therapy steadily expanding into new countries and realizing remarkable growth in countries where it has been long-established. This twenty year time span parallels the evolution of occupational science as proposed by Elizabeth Yerxa and colleagues (Yerxa et al., 1989; Clark et al., 1991) and others (Wilcock, 1993) that would provide a “foundation for occupational therapy in the 21st century” (Yerxa et al., 1989, p. 1). As occupational therapy and science grow, we are prompted to consider important questions. For example, how can occupational therapy best serve society to promote health and participation? What types of leadership does occupational therapy need to realize that goal and take it into the future? What can occupational science contribute to the profession to support its optimal outcomes?

In this lecture, Professor White will offer tentative answers to these questions. He will describe a brief history of the influences and the mentors that have shaped his own leadership development, identify challenges to leadership in the increasingly complex and global fields of occupational therapy and occupational science, and provide a brief occupational analysis of leadership. That is, the lecture will view leadership as an occupation and provide an analysis of it from a Person-Environment-Occupation (PEO) perspective. Professor White will profile leaders who have succeeded in orchestrating change and development of both fields and point to possible future directions for the profession of occupational therapy and the science of occupation. The analysis will include theoretical and practical examples from the current literature on leadership and from Professor White's personal experiences in order to highlight leadership themes of opportunity, commitment, vision, and relationships. The examples will include descriptions of research and progress in how occupational science intersects with occupational therapy, occupational justice, occupational therapy education, and everyday occupational therapy practice.

American Occupational Therapy Association (2014). Occupational therapy practice framework: Domain and process (3rd ed.). *American Journal of Occupational Therapy*, 68(2, supplement 1): S1-S51.

Clark, Florence, Parham, Diane, Carlson, Mike, Frank, Gelya, Jackson, Jackson, Pierce, Doris, Wolfe, Robert J., . Zemke, Ruth. (1991). Occupational science: Academic innovation in the service of occupational therapy's future. *American Journal of Occupational Therapy*, 45(4), 300-310.

Wilcock, A. (1993). A theory of the human need for occupation. *Occupational Science: Australia*, 1(1), 17-24.

World Health Organization (2001). *International Classification of Functioning, Disability and Health*. Geneva, Switzerland, Author.

Yerxa, Elizabeth, Clark, Florence, Frank, Gelya, Jackson, Jeanne, Parham, Diane, Pierce, Doris, Stein, Carol, Zemke, Ruth. (1989). An introduction to occupational science, a foundation for occupational therapy in the 21st century. *Occupational Therapy and Health Care*, 6, 1-15.

【御略歴】

作業療法士であるジョン A ホワイト ジュニア博士は、1978 年から様々な場面で作業療法の実践を行なってきました。現在はパシフィック大学の健康専門職校で作業療法学部の学部長を務めています。本大学は、博士が率先して作成した斬新なカリキュラムにより、アメリカで八番目に作業療法の専門博士号が取得できる学校となりました。博士は、1989 年、南カリフォルニア大学で作業科学の博士課程が始まったその年に、同大学で大学院生として学び始めたことを大変幸運だったと考えています。その場所で、作業の教育、研究、癒しの力としての作業適用に対する自分の情熱を見出したからです。フローレンス クラーク教授、エリザベス ヤークサ教授、ルース ゼムケ教授といったリーダーに師事したことで、ホワイト博士は、作業科学が作業療法という専門職や人間性に対しできることを熱心に考えるようになりました。そして、博士論文では、公平な雇用機会を創り出すという希望をもって、障害者の市民権政策に作業科学的視点を適用する研究を行なっています。ホワイト博士は、2001 年には、アメリカ作業研究協会の創立メンバーとなり、後に会長に就任しました(2010-2014)。本協会会長として、カナダ作業科学研究会、国際作業科学協会、日本作業科学研究会との連携を育て、最近では国際作業科学学会の学会長も務めています。また、アメリカ作業研究協会が、オンラインジャーナルに向けて作業科学研究を共有するための基盤作りや、作業療法の実践家が作業科学に近づきやいようにアメリカ作業療法協会と公的な関係性の構築することにも尽力しています。その他、研究に関しては、アメリカ作業療法設立協会の教育・学習奨学金制度において、60 名の新任教員の教育研究の指導するプロジェクトの共同リーダーを務めています。現在の学問的活動は、人（犯罪者や障害者を含む）がより満足した健康な生活を創造するために、人生における困難にどのように適応して行くかを焦点とし、作業的公正に関してこれから生まれてくる知識や、それが少数派の人々に作業の機会の公平さをもたらす可能性について楽しみにしています。White 博士は、奥様のボニーさんや2人の成人したお嬢さんと一緒に、アウトドアでハイキング、マウンテンバイク、カヤックなどをすることが好きです。また、ヨガ、音楽作り、写真、庭仕事、家のリモデル、宝石作りなども楽しんでいます。

【Profile】

John A. White, Jr., Ph.D., OTR/L has practiced in a wide range of occupational therapy settings since 1978. He is currently the Director of the School of Occupational Therapy in the College of Health Professions at Pacific University where he has led curricular innovation to become the eighth occupational therapy program in the U.S. to offer an entry-level Doctor of Occupational Therapy degree. White considers it good fortune that he found the University of Southern California for graduate studies in 1989, the year that the first PhD program in occupational science began. It was there that he discovered his passion for promoting education about, research into, and application of occupation as a healing force. Under the mentorship of leaders such as Professors Florence Clark, Elizabeth Yerxa, and Ruth Zemke he was prompted to imagine what occupational science could do for the profession of OT and for humanity. His dissertation research applied an occupational science perspective to analyze civil rights policy for people with disabilities in hopes of creating more equitable employment opportunities. In 2001, he became a founding member and later chair (2010-2014) of the Society for the Study of Occupation:USA. As chair he has fostered connections with other occupational science societies such as CSOS, ISOS, and JSSO and recently presided over a Joint International Occupational Science Research Conference. John helped SSO:USA build an infrastructure for sharing occupational science research that is intended to eventually lead to an online occupational science journal. He has supported the SSO:USA in building a more formal relationship with the American Occupational Therapy Association in order to make occupational science more accessible to OT practitioners. In other research endeavors, Dr. White was the co-leader of the national American Occupational Therapy Foundation Institute for the Scholarship of Teaching & Learning (2005-2012), a project that mentored over 60 new OT faculty members into educational research. His current scholarly work focuses on how people (including prisoners and people with disabilities) adapt to life challenges to create more satisfying and healthful living. He is looking forward to future scholarship on occupational justice and its potential for bringing more equitable occupational opportunities to minority groups. Professor White enjoys a wide range of occupations, sharing his love of the outdoors hiking, biking, and kayaking with wife Bonnie and two adult children. He also enjoys yoga, making music with others, photography, gardening, home-remodeling, and making jewelry.

Memo

病棟転換問題を考える

吉川ひろみ¹⁾，長谷川利夫²⁾，宮崎宏興³⁾，港美雪⁴⁾

1) 県立広島大学，2) 杏林大学，3) いねいぶる，4) 愛知医療学院短期大学

病棟転換問題の概要

2014年7月14日に厚生労働省は、長期入院精神障害者の地域移行に向けた具体的方策の今後の方向性をとりまとめ、精神障害者の段階的な地域移行や地域生活支援のために、病院資源の活用と称して、病棟をグループホームなど居住の場に転換することを認めた(<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000051136.html>)。当事者や支援団体は、これを「病棟転換問題」として反対運動を展開している。長谷川は、「病棟転換問題を考える会」を設立し、(<http://blog.goo.ne.jp/tenkansisetu/e/91ee73231a749a7e20d6df5b0e3b7c8a>)。個人288名、38団体の賛同を得ている。病棟転換は、人権侵害に相当する。

いねいぶるの取り組み

病院作業療法士としての経験から、宮崎は精神障害者の地域生活支援を目的とした特定非営利団体「いねいぶる」を2004年に設立した。いねいぶるでは、カフェ、弁当屋、清掃請負など多様な活動が展開されている(<http://enable.haru.gs>)。いねいぶるの活動の特徴は、常に当事者と話し合いながら進めている点である。自分たちが利用したい業種を自分たちの仕事にすることで、自分たちが暮らす地域を創ることができる。

作業剥奪

作業を選択したり、個人的、文化的に意味を持つ作業に参加したりするための平等な機会を全ての人 が得ているわけではないという Wilcock の指摘から、作業剥奪という概念が生まれた¹⁾。Whiteford は作業剥奪を「個人のコントロール外の要因のために、必要であったり意味のある作業に結び付くことから長期間排除されている状態」と定義した。精神病院の長期入院は、地理的孤立と類似する空間的制約があり、収監と同様に空間的、時間的制約がある。入院時の理由は疾病による症状だったかもしれないが、長期入院は精神障害者に対する社会からの排除といった当事者以外の理由による。従って精神病院の長期入院は作業剥奪に相当する。

作業的公正に向けて

すべての人がしたい、する必要がある作業ができる社会という理想を実現するために、私たちは何ができるだろうか。

文献

Whiteford, G (2010). Occupational deprivation: Understanding limited participation. In Townsend, E.A. & Christiansen, C.H. (Eds), *Introduction to Occupation: the Art and Science of Living 2nd ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson, pp. 303-328.

Discussion on Transfer Between Units in a Psychiatric Hospital

Hiromi Yoshikawa¹⁾, Toshio Hasegawa²⁾, Hirooki Miyazaki³⁾, Miyuki Minato⁴⁾

1) Prefectural University of Hiroshima, 2) Kyorin University

3) Enable, 4) Aichi Medical Junior University

Introduction

The Health and Labor Ministry addressed the idea of transfer from a psychiatric hospital to the community for long-term inpatients on 14 July 2014. Constructing group homes in hospitals was allowed instead of discharge from hospitals to the community. (<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000051136.html>) People with mental disorders and support organizations for them have disagreed with the idea. Hasegawa established the Organization for Thinking about Unit Transfer and published statements against the issue. Two hundred eighty-eight individuals and 38 groups showed their agreement with the organization. Transfer of units means a violation of human rights.

(<http://blog.goo.ne.jp/tenkansisetu/e/91ee73231a749a7e20d6df5b0e3b7c8a>)

Activities of Enable

Miyazaki established the non-profit organization for supporting the community life of people with mental disorders, Enable, in 2004 after he had worked in a psychiatric hospital as an occupational therapist. Members of Enable have worked in running a café, a lunch box shop, and cleaning jobs (<http://enable.haru.gs/>). Members always discuss during the process. They choose occupations they want as consumers. They have created their community through enabling their occupations.

Occupational deprivation

Wilcock suggested that not all people are afforded equal opportunities to participate in occupations of choice or in occupations having individual, familial, or cultural meaning. The concept of occupational deprivation emerged from Wilcock's suggestion. Occupational deprivation was defined as "a state of prolonged preclusion from engagement in occupations of necessity and/or meaning due to factors which stand outside of the control of the individual". Entering hospitals was caused by psychiatric disorders. However, long-term stay was caused by exclusion from society. Long-stay in a psychiatric hospital is one type of occupational deprivation.

Toward occupational justice

What do we do to bring about our vision in which all people can do what they want to do and need to do?

Whiteford, G (2010). Occupational deprivation: Understanding limited participation. In Townsend, E.A. & Christiansen, C.H. (Eds), *Introduction to Occupation: The Art and Science of Living 2nd ed.* Upper Saddle River, NJ, Pearson, pp. 303-328.

テーマ

「リーダーシップという作業を考える」



「リーダーシップ」について、どういうイメージを持っていますか？

普段から「リーダーシップ」を意識していますか？


自分とはあまり馴染みのないものと思っていますか？

今回、参加者全員で「リーダーシップ」と「作業」を結び付けて考えてみます。

明日からの自分の作業に何か変化が起こるかもしれません。

Theme

“Giving Thought to Occupation of Leadership”



About the "**Leadership** ," what kind of image do you have?

Are you always conscious of the "**Leadership**?"

Do you think it to be a too unfamiliar thing with oneself?

I relate "**Occupation**" to the "**Leadership**" with all the participants this time and think

Change might occur something to their Occupation from tomorrow.

Some change may happen for one's Occupation from now.

Memo

演題発表 Oral Presentations

11月15日（土） 13：20～14：20

～口述発表Ⅰ～

～Oral PresentationⅠ～

座長：港 美雪（愛知医療学院短期大学）

13：20～

No.1 『身体障害を有した高齢者における日常生活の展開過程：ケース・スタディ研究』

A Case Study into the Unfolding of Everyday Occupations for Elderly Japanese After a Physical Disability.

ボンジェ・ペイター（首都大学東京）

Peter Bontje（Tokyo Metropolitan University）

13：40～

No.2 『超高齢者の仕事を継続する意味と健康維持』

The Relationship of Continuing Work to the Preservation of a Very Old Person's Health

清田 直樹（茨城県立医療大学付属病院）

Naoki SEIDA（Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital）

14：00～

No.3 『酸素ボンベとともに生きる ―在宅酸素療法を行う高齢女性の生活―』

Living with an Oxygen Cylinder---Life of an Elderly Women Undergoing Home Oxygen Therapy--

吉永 幸恵（王子生協病院）

Yukie Yoshinaga（Oji Seikyo Hospital）

11月16日（日） 10：10～10：50

～口述発表Ⅱ～

～Oral PresentationⅡ～

座長：酒井 ひとみ（関西福祉科学大学）

10：10～

No.1 『障害のある子どもの家族はどのように社会を経験するのか
～作業を通した母親の視点からの分析～』

Society as Experienced by Mothers of Children with Disability:

Analysis of Occupations from the Mothers' Viewpoint

西方 浩一（文京学院大学）

Hirokazu NISHIKATA（Bunkyo Gakuin University）

10：30～

No.2 『社会参加前訓練：回復期リハ患者の経験に関する研究』

Pre-Training for Social Participation: Experience of Clients in Recovery Stage

小田原 悦子（聖隷クリストファー大学）

Etsuko Odawara（Seirei Christopher University）

11月16日（日） 9:00～10:00

～ポスター発表～

～Poster Session～

会場 A

司会進行：西野 歩（専門学校社会医学技術学院）

9:00～

No.1 『作業の知識の共有を目指して - 作業に焦点化した作業会議” 作楽（さくら）会” を通しての考察 - 』

Towards the Sharing of Knowledge of Occupation- "Sakura-kai" That was Focused to Occupation -

今元 佑輔（医療法人せのがわ 瀬野川病院）

Yusuke Imamoto（Medical Corporation Senogawa Senogawa Hospital）

9:10～

No.2 『精神科病棟における作業機能障害の改善を目指した心理教育の実践』

Reduction of Occupational Dysfunction in Psychiatric Wards Through a Psychoeducational Program

崎本 麻衣（横浜舞岡病院）

Mai Sakimoto（Yokohama Maioka Hospital）

9:20～

No.3 『作業に焦点を当てた作業療法を行うための組織改革～小さな町の一般病院における挑戦～』

Organization Improvement for Occupational Therapy Focusing to a Client's Occupation

～Challenge at a General Hospital in Small Town～

中塚 聡（諏訪共立病院）

Satoshi Nakatsuka（Suwa Kyoritsu Hospital）

会場 B

司会進行：古山 千佳子（県立広島大学）

9:00～

No.1 『カメラと共に人生を歩んだ女性の写真を撮るということの作業的意味』

Occupational Significance of Taking Photographs to a Woman Who Has Lived Her Life With a Camera

仲田 奈生（大山リハビリテーション病院）

Nao Nakada（Daisen Rehabilitation Hospital）

9:10～

No.2 『共通の理解地平を創り出すことで一歩を踏み出した事例

- やっと口にしたクライアントの思い - 』

An Example of Moving Forward by Creating the Horizon of Understanding

-Thoughts About a Client Who Eventually Talked-

鈴木 則世（よみうりランド慶友病院）

Noriyo Suzuki（Yomiuri Land Keiyu Hospital）

9:20～

No.3 『意味ある存在であり続けるために適応を支援する

～適応ストラテジーから末期がんのクライアントを理解する～』

Supporting Adaptation to Continue Being Meaningful Existence

～ Understanding the Client of the Terminal Cancer from an Adaptation Strategy～

渡邊 立志（津島市民病院）

Ryuji Watanabe（Tsushima city Hospital）

会場 C

司会進行：青山 真美（西九州大学）

9：00～

- No.1** 『作業に焦点をあてた介護予防プログラムの成果
- 作業に関する不安アンケートの結果より - 』

Effectiveness of an Occupation-Focused Program for Preventive Long-term Care Service
for Anxiety

伊藤 文香（茨城県立医療大学）

Ayaka Ito（Ibaraki Prefectural University of Health Sciences）

9：10～

- No.2** 『介護予防事業における挑戦したい作業に焦点をあてたアプローチの効果』

The Effect of the Approaches With Focus on Engagement in the Challenging Occupations in the
Care Prevention Service

横井 賀津志（関西福祉科学大学）

Katsushi Yokoi（Kansai University of Welfare Sciences）

9：20～

- No.3** 『アスリートのセカンドキャリア支援の在り方：作業科学的視点からの文献レビュー』
Second Career Support for Athletes: Literature Review from the Standpoint of
Occupational Science

金野 達也（茨城県立医療大学附属病院）

Tatsuya Kaneno（Graduate School of Health Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences）

9：30～

- No.4** 『新聞投稿から知る広島県における高齢者にとっての意味ある作業』
Meaningful Occupations for Older People Living in Hiroshima:
Analysis from Readers' Columns of a Newspaper

徳毛 幹子（阿品土谷病院）

Mikiko Tokumo（Ajina Tsuchiya Hospital）

身体障害を有した高齢者における日常生活の展開過程:

ケース・スタディ研究

ボンジェ・ペイター^{1), 2)}, 浅羽エリック^{2), 1)}Sissel Alsaker³⁾, Anders Kottorp²⁾, Staffan Josephsson²⁾

1) 首都大学東京, 2) Karolinska Institutet

3) Sør-Trøndelag University College

目的: 高齢者は、若い人よりも健康の衰えや障害を経験する可能性が高くなる。しかし、日常の作業を遂行する能力や、作業的な経験に影響を与えることに関する知識はまだ少ない。本研究は、高齢者が身体障害を発生した後、時間の経過とともにその人の日常の作業をどのように展開するかを探求することを目的とした。

方法: 研究のデザインは、縦断的ケース・スタディを採用した。研究参加者は、身体障害を有する4名の高齢者である。彼らを2〜3週間毎に1回の頻度で、6ヶ月間追跡調査した。研究参加者の作業遂行(AMPS)の測定と質的なインタビューおよび観察を行った。フィールドノートの定性的データはナラティブ分析を用いた。首都大学東京の研究倫理安全委員会に承認を得て実施した。

結果と考察: 発表では、「治療プロトコルがあいまいになっていく中で、冷静に問題に対処することが試練となった」72才の男性研究参加者の事例の分析を通して研究結果を説明する。そして、日常の作業の質に関して突発的に立ち現れる『どっちつかず宙ぶらりん』の状態を例示し、目的志向と問題解決の直線的思考のアプローチについて考察する。

Oral Presentation I

A Case Study into the Unfolding of Everyday Occupations for Elderly Japanese After a Physical Disability.

Peter Bontje^{1) .2)} , Eric Asaba^{2) .1)} , Sissel Alsaker³⁾

Anders Kottorp²⁾ , Staffan Josephsson²⁾

1) Tokyo Metropolitan University, 2) Karolinska Institutet,

3) Sør-Trøndelag University College

Aim: Older persons are more likely than other people to experience declining health and impairments, but little is known how this impact their abilities to perform everyday occupations and affect their occupational engagement. This research aimed to explore how everyday occupations unfold over time for elder persons after a physical disability.

Methods: This research employed a longitudinal case-study design. Participants were four elderly participants who were recovering from a physically disabling illness. They were visited once every two to three weeks for six months. Data consisted of qualitative interviews and observations complemented by measures of occupational performance (AMPS). The qualitative data analysis was a narrative analysis. This study was approved by Tokyo Metropolitan University's ethics review board.

Results and discussion: The analyses of a 72-year old man will be presented to illustrate the results, namely: *'taking things in his stride' put to the test because of his treatment protocol becoming ambiguous*. The discussion of this result will focus on the suspense (end-in-views) and emergent qualities of everyday occupations. Consequently the linear thinking of goal-oriented and problem-solution approaches will be discussed.

口述発表 I

後期高齢者の仕事を継続する意味と健康維持

清田 直樹¹⁾, 齋藤 さわ子²⁾, カークウッド 裕美²⁾

1) 茨城県立医療大学付属病院

2) 茨城県立医療大学

【はじめに】

日本の超高齢化社会においては、高齢者が社会で活躍し続けることが期待されている一方で、仕事に関しては、例えば定年退職後に再就職しても70歳前後で仕事を辞めるのが現状である。定年退職後、つまり仕事という作業を行わなくなった後の人の健康についての研究は少なくない（Jonsson et al. 2000）が、70歳以上で仕事を継続することと健康との関係についての研究はほとんどない。特に80歳以上の高齢で仕事を継続するその意味と健康に関する研究は日本では皆無と言える。そこで本研究は、80歳で仕事をしている後期高齢者の「仕事を継続する意味と健康維持」について理解する事を目的とした。

【方法】

情報提供者は、茨城県 A 町に住む仕事を継続している山田（仮名）さん、80 歳であった。手段は、半構造化面接を用い、IC レコーダに面接内容を記録した。面接者は、山田さんとは3ヶ月前からの知り合いで、1 週間に1、2 回程度5 分程度挨拶を交わし話をする馴染みのある関係であった。手順は、山田さんに研究内容を紙面と口頭で説明し同意を得た。面接場所は本人に馴染みがあり話しやすいアパート前のスペースで行った。データ分析は、逐語録を作成し時系列にテーマ分析を行った。分析は、作業に関する質的研究者1 名と共に行った。分析後、山田さんに分析結果について、相違がないかの確認を取った。

【結果・考察】

面接時間は全 80 分であった。山田さんの現在の仕事は、60 代に前職を退職後始めた“駐車場・アパート経営”であった。現在“駐車場・アパート経営”をする意味は、「すべてに通じるもの」「自分自身のため」であり、60 代ではじめた頃の「お金を稼ぐ・財産管理する」「家族のため」という意味から変化していた。また、仕事へのスタンスも 60 代の「若い人に負けない」から 80 歳では「周囲と協働」へと変化していた。「すべてに通じるもの」の「すべて」とは、財産管理、家族、近所付き合い、健康維持、自尊心、楽しく生きることであった。また、近所付き合い、健康維持、自尊心、楽しく生きると、“駐車場・アパート経営”を行うときに不可欠な「他者との交流」とは深い関係があることが語られた。仕事を継続する意味と健康維持との関係は、仕事をしているから健康が維持されるという語りであり、健康維持しているから仕事ができるというものではなかった。

【結語】

山田さんの仕事を継続する理由は、健康維持を含む自分自身が大事にしている全てのものにつながっているという思いからくることが理解された。また後期高齢者の作業を支援していくためには、地域または家族など周囲との人との交流とそれが及ぼす影響に配慮し支援する必要性を改めて理解できた。

【文献】

Hans Jonsson, Lena Borell, Gaynor Sadlo: Retirement: An Occupational Transition with Consequences for Temporality, Balance and Meaning of Occupations. J Occup Sci 7(1), 29-37, 2000

Oral Presentations I

The Relationship of Continuing Work to the Preservation of a Very Old Person's Health

Naoki SEIDA¹⁾, Sawako SAITO²⁾, Hiromi KIRKWOOD²⁾

1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital

2) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

[Introduction] Due to Japan's aging society it is expected that older people should continue to remain active; however, regarding work, while a common pattern is for older people to become reemployed after retirement, most leave employment around the age of 70. While research investigating the effects of not continuing occupations related to work has been published, there are few studies investigating the relationship of continuing work to the health of people over 70. In Japan, there are no published studies investigating the relationship of the meaning of continuing to work for people over 80 to their health in occupational perspective. Therefore this study aims to understand the relationship of the meaning of continuing work to the health of a currently working, 80-year-old, very old person.

[Methods] Informant: Mr. Yamada (a pseudonym), a currently working, 80-year-old living in A Town, Ibaraki Prefecture. The interviewer had known Mr. Yamada for three months before the interview through short conversations (around 5 minutes) held 1 or 2 times a week. Instrument: A semi-structured interview was recorded with a digital voice recorder. Procedure: Oral and textual explanations of the research were given to Mr. Yamada before gaining consent. The interview was held in part of Mr. Yamada's working space as it was familiar to Mr. Yamada and was a location where he found it comfortable to talk. Data Analysis: Thematic analysis was applied to a transcript of the interview, investigating the different understandings of work Mr. Yamada reported at different periods of his life. The analysis was completed together with a researcher experienced in qualitative analysis. Afterwards, the results of the analysis were presented to Mr. Yamada for confirmation.

[Results and Discussion] The total interview time was 80 minutes. Mr. Yamada started his current work in his 60s after leaving his previous employment. His work now involves managing apartments and parking areas. Now, for Mr. Yamada the meaning of doing this work is "connected to everything" and "for myself", which has changed from the meaning of his work in his 60s. At that time the meaning was "earning money and managing property" "for my family". His stance towards work also changed, in his 60s it was "not losing to young people", but now it is "cooperating with people around me". The "everything" in "connected to everything" includes *managing property, family, relationships with neighbors, preserving health, self-respect, and living happily*. He also told the interviewer there is a deep relationship between *relationships with neighbors, preserving health, self-respect, and living happily* and interacting with others, which is essential to the management of parking and apartments. The relationship between the meaning of continuing work to preserving health was that work preserves Mr. Yamada's health not that preserving health enables Mr. Yamada to work.

[Conclusion] This study suggests that the reason to preserve work for Mr. Yamada comes from a feeling connected to everything he feels is important, including preservation of his health. This study gives further support to the argument that to support occupations of very old people it is important to consider the effect of interaction with community, family and people around them.

口述発表 I

酸素ボンベとともに生きる ―在宅酸素療法を行う高齢女性の生活―

吉永 幸恵¹⁾, 近藤 知子²⁾

1) 王子生協病院 2) 帝京科学大学

【はじめに】全国の在宅酸素療法 (Home Oxygen Therapy: 以下、HOT) は、1985 年の社会保険適応以降急速に普及し、現在適用者数は約 12 万人を超えると推定されており、年々増加している。慢性呼吸不全の人が、病院でなく自宅で生活できる在宅酸素療法は、人間的な生活と Quality of life を保証するものであり、その意義は高く評価される (2006)。しかし、筆者は、作業療法士として HOT を行う人の生活に関わる中で、HOT を拒む人や使い始めたにも拘わらず中断してしまう人に少なからず出会ってきた。HOT に関しては、「対処行動」「過程」などの報告は発表されているが、日常生活の作業の遂行においての成功体験や困難な常用、それに伴う思いなど、生活の経験が詳細に分析されたものは見当たらない。本研究は、所属病院倫理委員会の承認を得ている。

【目的】本研究は、6 年間 HOT を行い続けてきた高齢女性がどのように生活してきたか、どのような経験をしてきたかを当事者の視点から探り、理解することを目的とする。

【方法】対象：70 歳代女性 (以下、A さん)。家族構成は夫と 2 人暮らし。8 年前に間質性肺炎と診断され、6 年前に急激な呼吸苦を自覚して重篤な呼吸機能低下に至り、以後 HOT を行って生活している。筆者は、HOT を行っている A さんが 1 週間検査入院した際に病院の作業療法士として出会い、40 分 4 回の作業療法で関わった。データ収集：1 日の生活の流れの質問など、半構造的なインタビューを 1 回、約 90 分行った。対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。分析方法：逐語録より、目的に合致した部分の語りを抜粋し、質的帰納的に分析した。

【結果と考察】HOT を行って生活している A さんの生活の経験から、以下の側面が抽出された。

第一に、A さんが、命を繋いでいくための必須な道具として HOT を捉えている側面である。「使っていないとだめ」、「ずっとしていたほうが体にいい」、と語られており、HOT を常時行うことで現在の身体を保てるとの意味づけがなされている。「試しに外したとき、苦しくて苦しくてしょうがなかったから、外せないと思った」との語りは、直感的に HOT が必要不可欠な存在であると認識された経験であり、「調子がよかったとき、(酸素のチューブを) 少し外してみようか」とも考えたが、「やっぱり不安で」外して過ごすことはしていない。A さんは、生活の中で HOT 非実施の選択肢を考慮するような語りはされなかった。HOT が適応となる直前の経験もまた、この側面と深くかかわっていた。「ふらふらになって、息苦しくてものも食べられなくて」、入院となった後、「息苦しくて脂汗かいて、意識も朦朧」とした。治療を経て A さんは、「私また息が吸えるようになったんだ。すごい。よく復活したなああって思った」。呼吸苦からの解放、命が繋がったことの感動が、A さんと HOT との繋がりをより強めていることを示す語りであると考えられる。第二に、A さんが HOT を行うようになって「これ (酸素ボンベと鼻腔を繋ぐチューブ) があるから大変」だが、「しなきゃいけないことをしている」という、大事な作業に従事し続ける側面である。長いチューブを手足でさばきながら家の中を歩き回り、家事をすることは労力が大きく、手間取って相当のイライラが募ることもある。しかし、「どうやったらいいか、だんだん慣れてわかってきて」、徐々に疲弊し難い活動方法を工夫できるようになった。「ひとつの場所でできることはまとめて」行い、「時間がたっぷりかかる」ことを考慮した生活を組み立てている。HOT 導入後は、導入前の自身と対比させ、「さっさと動けなくなっている」と認識している。「動きにくいし、恰好悪いし、無理してやることないなと思って」、カラオケ、ダンスの活動は中止した。一方で、「孫がこのあいだ家に来た時、昔よく食べたあれ、作ってよ、なんて言うから、ちょっと大変だなあとは思っても」、料理をできる範囲でつくって食べさせる。「いつもと同じことができてよかったなって。こんな恰好になっちゃったから一線引く、っていうんじゃないしに付き合える」、と HOT 導入前からの作業の維持を通じて安心感を得る語りもみられた。

これらの二つの側面はお互いに影響し合い、A さんが HOT を行い、制限されながらも質の高い生活を送り続ける上で不可欠な意味をもっていると考えられる。

【文献】谷本晋一 (2006)：在宅酸素療法 克誠堂出版

Oral Presentations I

Living with an Oxygen Cylinder

---Life of an Elderly Women Undergoing Home Oxygen Therapy--

Yoshinaga Yukie¹⁾, Kondo Tomoko²⁾

1) Oji Seikyo Hospital 2) Teikyo Science University

[Introduction] Home Oxygen Therapy (hereafter HOT) had spread rapidly throughout Japan after it became a subject of social insurance coverage in 1985. It is estimated that over 120,000 people are presently using this treatment and the number is increasing year by year. Patients with chronic respiratory failure who can receive HOT instead of being treated at the hospitals are guaranteed “the quality of life,” to live like human beings, and its significance is highly valued (2006). However, as an occupational therapist conducting HOT, I have met people who refuse this treatment or quit after a short time. Reports related to HOT on such topics as “coping behavior” and “the process” have been published, but the detailed analysis on the successful experiences and difficulties in doing daily work and the feelings associated with such life experiences is yet to be found. This research has been approved by the Ethics Committee of Oji Seikyo Hospital.

[Purpose] The purpose of this study is to explore and understand how an elderly women continuing HOT for 6 years has lived and see what she had experienced from her point of view.

[Method] Subject: A 70-year-old woman (hereafter, A) living with her husband. She was diagnosed as having interstitial pneumonia 8 years ago and experienced a sudden respiratory distress leading to severe respiratory dysfunction 6 years ago. Since then she has been on HOT. I met A at the hospital I work at as an occupational therapist when she was hospitalized for one week for her examination during the time she was on HOT. I conducted 40-minute therapy four times during that week. Data collection: An 1-time-only semi-structured 90-minute interview with questions related to a day’s activities was conducted. With the permission of A, the interview was recorded and verbatim transcription was made. Analysis method: From the transcription, excerpts were taken out of the narrative that conformed to the purpose of this study, which was then qualitatively and inductively analyzed.

[Results and Consideration] From the life experiences of A using HOT, the following aspects were found. First of all, HOT is an essential tool for A to sustain her life. “I cannot live without it,” “It’s good for my body to continue this therapy,” says A who believes relying on HOT at all times maintains her current physical condition. “I removed it once just to see what will happen, but I was in so much pain that I knew I couldn’t live without it,” is the experience A had to reconfirm the essentiality of HOT for her livelihood. There were times she thought about removing the oxygen tube for a little while when she felt good, but her fear was stronger that she didn’t risk the chance to remove it. A did not mention the consideration of living without HOT as a choice in her life. Her experience just before implementing HOT backs up this aspect as well. “I was dizzy, had difficulties breathing and couldn’t eat anything.” Even after hospitalization, she was sweating from suffocation, and feeling faint. The treatment she received allowed her to breathe again and she was impressed with the outcome. She thought it was amazing that she had recovered. Gathering what A had said in the interview about being liberated from respiratory distress and was deeply moved to be alive, it can be considered that these factors had strengthen the connection between A and HOT.

Secondly, A says, “Having this (tube connecting oxygen cylinder and her nose) is a nuisance, but I do what is necessary.” This is one of the aspects she engages in as a part of the important operation. It takes great effort to walk around the house doing housework while handling the long tube with her hands and feet, often raising considerable frustration. However, she says she is getting used to it and gradually becoming creative in challenging difficult tasks. She combines several chores that can be done in one place and schedules enough time for each task. Comparing before and after implementing HOT, she recognizes her inability to move quickly. “It’s difficult to move and is unattractive, so I decided to quit going to karaoke and taking

dancing lessons. But on the other hand, when my grandson came to visit and asked me to make something he often had in the past I make the effort to make it even though it's a lot of work." This incident reminded A that she can still make something for her family and feel good about doing things she was able to do before and not to withdraw herself from associating with other people. I thought from this incident, she came to realize that she can still do certain things she did before which had given her a sense of security.

These two aspects influence one another and it can be considered that HOT is essential to A's life in order for her to maintain a high quality lifestyle although being limited in her activities.

[Reference] Shinichi Tanimoto (2006): Home Oxygen Therapy, Kokuseido Shuppan



Memo



作業の知識の共有を目指して

-作業に焦点化した作戦会議“作楽(さくら)会”を通しての考察-

今元 佑輔

医療法人せのがわ 瀬野川病院 リハビリテーション科

[はじめに]

作業療法士(以下 OTR)は、入院中のクライアントが、退院後の地域での生活、または病棟での時間の過ごし方など、生活場面における意味のある作業に繋がるよう支援を検討し実施する。しかし、精神科作業療法(以下 OT)場面では作業を楽しむ事が出来る、健康的な一面が見られるクライアントが OT 場面以外での時間の過ごし方に難しさを感じている事は少なくない。そこで、OTR が治療介入の中で利用していた作業の知識を“クライアントが生活の中で活用出来る知識として共有する事”が可能になれば、クライアントが実際の生活場面でも作業を楽しみ、健康的に過ごす事をサポート出来ると考え、“楽しいと感じる作業”を考える視点として、ライフスタイル再構築プログラムの構成を応用した作楽(さくら)会と名付けたグループミーティング(以下、作楽会)を実施した。

[研究目的]

OT の中で作楽会を通して、クライアントと作業の知識を共有する事が、どのような影響、変化を与えるのかを明らかにすることにより、クライアントの生活場面での作業の変化、幸福感に繋がる OT 介入実現の一助とする。

[研究方法]

急性期女性病棟(全 12 名)を対象に、週 1 回、1 クール全 4 回、オープンに参加者を募集した。1) 1 日の作業を振り返ってみよう、2) 私の楽しいと感じる作業はこれだ、3) 作業ストーリーを思い出してみよう、4) 作業のバランスを考えよう、の 4 つのテーマを説明後、個人で検討し、互いに発表するという形式によって実施した。研究対象者は、作楽会に 1 クール参加し、研究参加の同意を得ることが出来た患者様 2 名とし、半構成的インタビューを実施後、グランデッドセオリーアプローチによるデータ分析を行った。本研究を行うにあたり、文書で説明し、書面による同意を得た。

[結果]

データ分析の結果、“幸せに繋がる作業を創造するプロセス”として、1) 作業検討の経験の無さと難しさ 2) 作業検討の継続を可能にする要素 3) 作業的存在としての自己の再認識 4) 作業的存在としての相互理解 5) 幸せに繋がる作業の創造という 5 つのカテゴリーが明らかになった。対象者からは「楽しみな作業のために断酒しようと思う。」、「OT で取り組んだような楽しい作業を今後の生活の中でもしていこうと思う。」といった前向きな変化が語られた。

[考察]

作楽会の中で、作業的存在として自身を振り返っていくことが、自己の再認識へと繋がった。“楽しいと感じる作業”と“作業を楽しめる自己”の発見に影響を与え、対象者の気分、行動が変化していく可能性が示唆された。また、OT や作業の知識がないクライアントにとって、OT の理解を深め、作業の知識を持ったうえで OTR と協働していくことを可能にすると考え、ライフスタイル再構築プログラムの構成と同様に、作業の知識を得て、自身の経験を振り返り、グループで共有していくという、「講義」・「情報交換」は、実施しているが、「体験」・「生活での発展」に関しては不十分である。「講義」・「情報交換」の中でクライアントの作業に焦点を当て、クライアントにとって意味のある作業を、その人らしい方法で「体験」し、「生活での発展」に繋げる実践方法を検討していくことが課題である。

Towards the Sharing of Knowledge of Occupation

- "Sakura-kai" That was Focused to Occupation -

Yusuke IMAMOTO

Medical Corporation Senogawa Senogawa Hospital Department of Rehabilitation

[Introduction]

Clients with mental illness can spend healthy time through activities that managed by occupational therapist. However it seems that clients have difficulties to spend healthy time at home. I conducted the group meeting, named "Sakura-kai". The purpose of this meeting is to share occupational knowledge to use for daily life by occupational therapist and clients.

[Purpose]

The aim of this study is to understand the impact to the clients of participating in the meeting of "Sakura-kai".

[Method]

The participants for the study were recruited from 12 inpatients. The informant was examined individually after have heard the explanation from the OTR. The informants share ideas with each other then. Data were collected through semi-structured interviews for two participants and were analyzed by constant comparative method. I explained about this study to the informants and ethical consent was obtained.

[Result]

Results of the data analysis, as "the process of creating occupation that leads to happiness", was revealed. The informants were talking about positive change. "I think I try to abstain from drinking for fun occupation". "I think I try to fun occupation".

[Discussion]

The informants re-recognize the self in Sakura-kai. There is a possibility that the mood and behavior changed by participating in Sakura-kai. The client can deepen the understanding of the OT by participating in Sakura-kai. The client can then cooperate more strongly with OTR.

精神科病棟における作業機能障害の改善を目指した心理教育の実践

崎本麻衣

横浜舞岡病院 地域生活支援部 作業療法室

【はじめに】作業機能障害（以下 OD）とは、クライアントが作業を適切にやり遂げることができない状態を指し、健康状態が悪化したり QOL が低下すると考えられている（京極，2010）。種類には作業不均衡、作業剥奪、作業疎外等がある。精神科病棟では、閉鎖的な環境により大切な作業に取り組む機会や物品が少なく、作業剥奪の状態である方が多いと考える。また、日々の入院生活に意味を感じられずに過ごしている方も多く、作業疎外の状態である方も多いと考える。心理教育は、「精神障害やエイズなど受容しにくい問題を持つ人たちに、正しい知識や情報を心理面への十分な配慮をしながら伝え、病気や障害の結果もたらされる諸問題・諸困難に対する対処方法を修得してもらうことによって、主体的な療養生活を営めるよう援助する技法」と定義されており、「エンパワーメントの援助となる」といわれている（浦田，2004）。今回、OD の改善を目的に、OD に関する知識や作業体験の振り返りを取り入れ、心理教育を実施した。知識の獲得、体験の振り返り、他参加者との体験の共有によりエンパワーメントされ、参加者の OD の改善に向けた行動につながったため報告する。

【プログラム概要】入院生活における OD の改善を目的とし、週 1 回 1 時間、1 クール 10 回、セミクローズ、作業療法士 2 名で、平成 25 年 3 月より開始した。参加者は慢性期の統合失調症者が主であり、1 回の人数は 4～8 名であった。実施内容は大きく分けて、情報提供、作業体験の振り返り、参加者同士の話し合いであった。情報提供として症状について、薬の飲み方、ストレス対処等の医学的知識に加え、OD の概念、精神科病棟は OD となりうる環境であることを説明した。また、作業機能障害の種類と評価（寺岡他，2013）を用いた現在の作業体験の振り返りや、入院前の生活がどのような作業で構成されていたかの振り返りを行った。それらを行う中で、入院生活で行いたい作業や自分でできることについて参加者同士の話し合いを行った。本発表に際し、当院病院長より同意を得た。

【結果】作業体験の振り返りでは「今の時間を無駄に過ごしているような気がする」と作業疎外の状態であることや、「日課であった料理や散歩ができなくなってしまった」と作業剥奪の状態であることを語った。自身の OD の状態について理解を深め、他参加者と体験を共有する機会となった。回を重ねる中で、作業疎外に対して入院生活の目的を見出す者や、医師との診察に主体的に取り組むといった現在の生活に意味を見出すようになった者がいた。作業剥奪に対しては入院前に行っていた作業を作業療法プログラムで取り組んだり、日課として入院生活に取り入れるようになった者がいた。

【考察】OD に関する知識の獲得、作業体験の振り返りや共有を通しエンパワーメントされ、参加者の行動の変化につながったと考える。OD となりうる環境では、作業を提供する場だけでなく OD の改善に向けた行動をエンパワーメントする場を作ることが、作業療法の役割として重要と考える。

文献

- 京極真（2010）．作業療法士のための非構成的評価トレーニングブック—4 条件メソッド．誠信書房．
- 浦田重治郎（2004）．心理教育を中心とした心理社会援助プログラムガイドライン（暫定版）．厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 13 指 2．統合失調症の治療およびリハビリテーションのガイドライン作成とその実証的研究成果報告書．
- 寺岡睦，京極真，中山朋子，西本佳加，山崎信和，他（2013）．作業機能障害の種類と評価（Classification and Assessment of Occupational Dysfunction; CAOD）の試作版作成．総合リハビリテーション，41，475-479．

Reduction of Occupational Dysfunction in Psychiatric Wards Through a Psychoeducational Program

Mai Sakimoto
Yokohama Maioka Hospital

Introduction: Occupational dysfunction (OD) refers to a state in which an individual is unable to properly engage with their occupation. As such, OD may be considered a threat to both personal health and quality of life. In psychiatric wards, inpatients often experience occupational deprivation and alienation. Psychoeducation can include interventions that allow inpatients to gain valuable knowledge about and learn coping strategies to manage their illness. Such programs also promote empowerment. To reduce OD, a psychoeducational program was created that utilized OD knowledge and reflected on occupational experience.

Program summary: The purpose of the program was to reduce levels of OD during hospitalization. It consisted of 10 sessions, each lasting an hour a week. In total, 4–8 individuals suffering from schizophrenia participated in each session. The program was structured around three factors: providing knowledge, reflecting on occupational experiences, and discussion between the participants. The information given in the first program component related to symptoms of schizophrenia, pharmacotherapy, stress management, the concept of OD, and the occurrence of OD in psychiatric wards. Participants reflected on past occupational experiences by completing the Classification and Assessment of Occupational Dysfunction (CAOD) survey and reliving their occupation prior to hospitalization. Participants then discussed the possible occupations available to them and assessed what they can do whilst in hospital.

Results: Following their reflections, participants discussed their feelings of occupational deprivation and alienation. During the program, participants deepened their understanding of their own experiences with OD and shared this with other participants. Some participants accepted their occupational alienation, were able to find new meaning in their present life in hospital settings, and worked independently with their doctors on their medical treatment. In addition, a few participants minimized their occupational deprivation by resuming their previous occupation in hospital settings.

Discussion: By acquiring OD knowledge, reflecting on occupational experience, and sharing these experiences with other participants, those in the program developed a sense of empowerment and undertook action to reduce their levels of OD. In places where OD can occur, such as psychiatric wards, it is important to not only provide inpatients with an opportunity to engage in occupational activities but also grant them the opportunity for empowerment.

作業に焦点を当てた作業療法を行うための組織改革

～小さな町の一般病院における挑戦～

中塚聡¹⁾，宮澤裕和¹⁾，大西美穂¹⁾，近藤知子²⁾

1) 諏訪共立病院 2) 帝京科学大学

【はじめに】作業療法は、作業を通じて人の健康を促進する(2010)。しかし、病院における作業療法(以下、OT)は、作業療法士(以下、OTR)や他職種の無理解、又、物理的な環境の乏しさや施設が OTR の実践を承認しないなど、作業のできる環境の乏しさから、作業療法の焦点が身体機能の改善や ADL の獲得に留まることも少なくない。当院における同様の状況を改善するために、OT 部門内および院内外に働きかけてきた。3 年を経た現在、OT 部門全体に変化がみられ、院内だけでなく院外からも OT の実践を認められるようになった。本報告は、当院において作業に焦点をあてた実践を行うために実施した OT 部門内外への試みを事例として紹介しつつ、変化の要因を探ることを目的とする。

【施設紹介】当院は人口 2.1 万人の A 町に唯一の一般病院で、病床数は 99 床(回復期病棟 43 床、一般病棟 56 床、外来、訪問リハなどを実施)の小規模な病院である。平成 26 年 4 月現在、リハスタッフ 47 人(OT15 名、PT26 名、ST6 名。OT の平均経験年数は 4.9 年)おり、主な対象疾患は脳血管疾患、大腿骨頸部骨折などの整形疾患、廃用症候群などである。試み以前は、CL に対して OT では主に身体機能や ADL への介入が行われていた。

【経過】<開始時>まず OT 部門主任に「作業に焦点を当てた OT 実践」を説明し、主任同意のもと OT 部門内で定期的なミーティングを始めた。又、リハ科内の毎週の勉強会を月に 1 度は職種別勉強会とし、OT 部門内で作業に焦点をあてた実践の手法や、その効果を話し合うなど情報共有を行った。これらを通して、OT 開始前に、CL に対して作業療法を説明し、CL と作業目標を共有し、作業に焦点をあてた OT を実施することを説明する面接を行うこととした。経験の少ない OTR が一定の技術で面接を行えるようにするため、面接用のバインダーを作成するなど工夫を施した。偶然重なった院内での OT 室の引っ越しに際し、キッチンや園芸の出来るベランダ、インターネット、自動車運転装置などを整備し、様々な作業が行える環境を整えた。この結果、作業に焦点をあてた実践が徐々に増えはじめた。

<2 年目>実践は OTR の間では受け入れられるようになったが、他職種からの承認はなかなか得られず、作業に焦点をあてた OT 室外での実践には反対の声もあった。しかし、近隣の PT・OT・ST 交流会にて OT の実践について発表したところ、他施設の専門職から高い評価を得、院内の PT など他職種からも承認が得られるようになった。OT 室以外(CL の自宅や店舗、公共施設など)で OT を行いやすい環境と雰囲気が生まれ、院外での OT から笑顔で帰ってくる CL をみて、他職種も訓練室以外で訓練を行う様子がみられるようになった。

<3 年目>試み開始から 3 年が経過した現在、院内の学術集会やリハ科の新人研修などで OT の実践を伝え続けている。これにより院内で作業に焦点をあてた実践と、OT の専門性の認知が深まっている。他職種も作業の視点でコミュニケーションをとる機会が増え、又、職種間の日常的な会話でも「作業」という言葉が使われ始めている。更に近隣の病院や施設から、当院の OT の実践が注目され、講師として招かれるようになったことで、院内における OT の認知がさらに高まり、技術部長(PT)からは「これからのリハビリは、まず CL の人生や生活を OTR が把握し、それに必要なことを各職種が担うべきだ」と言われるまでに至った。

【考察と今後の課題】

今回の試みは、CL に対して作業に焦点をあてた OT を提供するための OT 部門の変革である。用いた戦略は主に、①OT 部門全体の意識改革、②OT 部門外へのアピールであった。①においては、主任の同意を得たこと、定期的なミーティングや勉強会を職場全体のものとして実施したこと、実践が可能な物理的環境を整えられたこと、CL に著明な変化がみられたことなどの影響が大きいと考える。②では、院外での発表による実践への承認が、院内での承認につながった。又、OT 室外での実施により、他専門職が CL の変化を目の当たりにしたことも OT 実践に対する認知を促した。今回の試みを通して、一般病院でも OT 部門の変革により、作業に焦点をあてた OT を提供することが可能であることを理解できた。部門の変化は、病院全体や近隣施設からの承認と密接に

関係し合っており、部門外へのアプローチも重要であることが示唆された。試みは結果として、OT 部門の変化だけでなく、病院全体の変化や近隣の施設の変化の兆しへと結び付いた。このような試みにより、当院だけでなく、近隣施設も含め、より多くの CL が作業に焦点をあてた OT を受けられる可能性が広がると考える。

引用文献: World Federation of Occupational Therapy (2010) Statement on occupational therapy
[online] www.wfot.org.au/document_centre (2014.9.30)

Poster Session Room A

Organization Improvement for Occupational Therapy Focusing to a Client's Occupation ~Challenge at a General Hospital in Small Town~

Satoshi Nakatsuka¹⁾, Hirokazu Miyazawa¹⁾, Miho Ohnishi¹⁾ and Kazuko Kondo²⁾

1) Suwa Kyoritsu Hospital, 2) Teikyo Scientific University

[Introduction] Occupational therapy(OT) promotes health and well-being through occupation. To OT in a hospital, the therapy focusing to a client's occupation meets many difficult cases due to a lack of appropriate understanding at OT and other fields in therapy and to a lack of environment for sufficient occupations and a lack of the approval of the hospital. As a result occupational therapists registered(OTR) are concerned mainly with improvement of physical functions and ADL of the clients. There were same problems in our hospital in three years ago. In order to put a new policy of "focusing to occupation", many appeals is given to our OT division and other groups in/out of our hospital. This movement opens new horizon at our OT team and our practice was evaluated in the hospital and outside organization. This report shows some trials of new practice focusing to occupation.

[Scale of our hospital] Our institution is an only one general hospital in A-town of 21-thousands population. The small-scale hospital has 99 beds including 43 beds for a rehabilitation ward for outpatients, visiting rehabilitation and short-time daycare. The number of staffs of rehabilitation department is 47 persons consisting of 15 OTRs, 26 RPTs and 6 RSTs. The average years of experience of OT members is 4.9 years. Main diseases of subject are cerebral vascular disease, orthopedic disease due to femoral neck fracture etc. and disuse syndrome. Before the trial reported here, OT division deals with all clients for improvement of physical function and ADL.

[Progress of trial] <Starting year> after the object of "OT-practice focusing to occupation" was explained to the chief of OT division, the periodic meetings were held in our division. Once a month, a weekly study-meeting in the rehabilitation department was changed into three meetings of each type of job (OT, PT, ST). In OT-meeting, many technical skills were discussed for practice focusing to the occupation, and the information on new effects observed in the clients were exchanged each other for a common recognition. The following processes in OT practice were proposed in interviewing the clients. 1) Before beginning OT practice, the explanation of "What is an occupational therapy?" is given to the client. 2) OT and the client possess jointly a clear object of the occupational therapy. 3) The practice of OT was focused to a client's occupation. The new material (so-called "binder") for interview was invented and introduced for a new-coming OT member to keep an interview technique a higher level. New environment for clients was prepared such as a small kitchen, veranda for gardening, Internet devices, and a training facility of driving a car. <Second year> the "practice focusing to the occupation" was gradually accepted by the OTRs, but other division (PT, ST) did not fairly receive the practice effectiveness. Especially a practice focusing to the occupation outside the OT rooms was opposed. The practice reports from OT division were presented frequently to the meetings with neighboring groups of PT, OT and ST. The high evaluation given by other organization professionals enlarged the support from PTRs *et al.* of our hospital. Then the new environment and atmosphere were generated that the practice outside OT rooms is possible for example at client's home, their shops, and public facilities. As the clients showed laughing faces when they came back from outside OT practice, PT and ST division also started an outside practice from their training rooms. <Third year> we continued to report the resulting effects of our practice at the technical meeting in the hospital and the

newcomer-training course at the rehabilitation department. We can conclude the deep recognition appears in our minds for the practice focusing to the occupation and also the specialty of OT division. Our activity at OT division was paid attentions from many neighboring hospitals and facilities, being invited as a lecturer at many meetings. The PT technical managerial person said recently “In future rehabilitation, the OTR should recognize at first the life and living of a client and then many job-parts of our hospital take part in therapy for needed treatments for clients”.

[Report conclusion and future subjects] The object of our new trial is a conscious revolution of the occupational therapy division for presenting to clients a definite object, “occupation” of the client’s life. The strategies used in the trial are mainly 1) a consciousness reform of our OT division, 2) an effective appeal to the outer organizations from our OT division. For a former term, the practice idea was given at first to the chief of our OT division; the periodic meetings were held as an official activity with all members constructing an identity of the division; the physical environment was prepared to do practice focusing to the occupation; finally a remarkable change was visible at respective clients. For the latter, many presentations on our activity at outer organizations were very effective to get an approval of the inner divisions of our hospital. Our OT practice outside our playing-rooms stimulates real recognitions of our hospital colleagues to see the delighted change of the client’s expression. In a viewpoint that a client’s desire is a most important item, the potential occupational therapy will diverse to not only our hospital but also neighboring facilities.

カメラと共に人生を歩んだ女性の写真を撮るということの作業的意味

仲田奈生 田中一喜 松浦晃宏
大山リハビリテーション病院

【はじめに】長年カメラに携わってきた本クライアントにとって、カメラはなじみのある作業であるが、現状ではその作業に取り組むことへの躊躇いがある。担当セラピストはクライアントの今の生活にカメラを加えることで、生活に変化を生みだし、健康を取り戻したいと考えた。そこで生活史研究^{1,2)}の手法により、クライアントの作業歴を聴取し、その経験や思い、環境要因などの関係性を分析することで、カメラへの躊躇いの要因を明らかにすることを試みた。

80歳代女性。ケアハウス居住。デイサービス週2回利用。要介護度2。50歳頃より友人の勧めでカメラを始める。その後、趣味として始めたカメラが仕事へと変化し、新聞の連載を任されるようになる。また、カメラを通して多くの友人ができ、撮影のため多くの場所に足を運んだ。そして、数々の作品の入選を繰り返し、二科会の会友・会員・審査委員の経歴を持っている。家族構成は、長女が近隣に在住し、夫は入院中である。

対象者には研究の目的、内容などについて十分に説明したうえで、書面にて同意を得た。また、本研究の実施にあたっては大山リハビリテーション病院倫理委員会の承認を得て行った。

【方法】クライアントに半構成的インタビューを実施し、ICレコーダーに録音、会話内容を逐語化した。分析は「写真を撮らなくなった理由」をテーマに、文章化された物語を生活上の出来事、対象者の思いや行動の変化など、単一の記述データに分割し、コード名を与えた。そこからコードを分割し、カテゴリーを生成し、さらに大カテゴリーを生成した。コードとカテゴリー、大カテゴリーには、対象者の体験や現象を特徴づける表題を付与した。すべての過程において、複数名で分析結果の吟味を行った。

【結果】分析過程から6つの大カテゴリー、9のカテゴリー、14のコードが生成された。生成された6つの大カテゴリーは「娘に対する気持ち」、「身体の不調」、「家族の生活状況」、「住環境の制限」、「友人との外出の喪失」、「写真への価値観」であった。

分析の結果より、クライアントの身体機能の低下、家族の生活状況の変化に伴い、ケアハウスでの生活を余儀なくされていく中で、娘に頼らなければならない立場へと変化し、娘への遠慮や娘を大事に思う気持ちが強くなっていったことがわかった。その経過とともに、カメラに対する優先順位は徐々に下がっていったものと考えられた。また、以前は仕事や友人との交流、自身の価値観の表現の手段としてカメラを行っていたが、現在では様々な状況の変化により、以前のような社会参加の機会も消失していることがわかった。

カメラがクライアントにとってどれほどの作業的意味の強さを示すことは容易ではないが、今回の結果では、クライアントのカメラという作業は、以前ほどの強い意味合いを持たなくなっているということが理解できた。

【文献】

- 1) Larson EA, Fanchiang S : Nationally speaking : Life history and narrative research : Generating a humanistic knowledge base for occupational therapy. Am J Occup Ther 1996 ; 50 : 247-250
- 2) 八田達夫, 小林正義 : 作業療法研究法マニュアル. 日本作業療法士協会, 2006

Poster Session Room B

Occupational Significance of Taking Photographs to a Woman Who Has Lived Her Life With a Camera

Nao Nakada, Kazuki Tanaka, Akihiro Matsuura
Department of Rehabilitation, Daisen Rehabilitation Hospital, Japan

[Introduction]For the client who has been involved with photography for many years, using camera is a familiar work. However she is hesitant about the work under the current circumstance. Her therapist wished for her to regain health by introducing camera to her life, which would create a change to her present situation. Therefore, using a method of life-history research, we attempted to clarify the reason for being hesitant about photography by obtaining the client's occupational history and by analyzing relationships with her experiences, thoughts, and environmental factors.

[Introduction of the case]A woman in her 80s. Nursing care center resident. Uses day service twice a week. Nursing care level 2. Started photography around the age of 50 with encouragement of a friend. After starting it as a hobby, photography became her occupation and she was asked to serialize her work in a newspaper. Also, she made many friends through photography and visited various locations for photo shoots. Her work repetitively won prizes and she has a career of being a fellow member, member, and an exhibition jury of Nika Art Exhibition. As for family members, her eldest daughter lives in the neighborhood, and her husband has been hospitalized.

The case has been fully explained about the purpose and contents of the study, and she signed the consent document. Also, implementation of this study was approved by the ethical review board at Daisen Rehabilitation Hospital.

[Method]Semi-structured interview was conducted with the client, the conversation content was recorded to an IC recorder, then it was documented word for word. The theme of the analysis was "why she stopped taking photographs", and the documented story was divided into groups such as life events, the candidate's thoughts, and changes in action, within a single description data. Each group was given a code name. From there, the codes were divided into categories, and then they generated larger categories too. Each code, category, major-category was given a title that characterizes the experience and phenomenon the candidate went through. Throughout every process, analysis results were examined closely within the study group.

[Result]During the analyzing process, 6 major-categories, 9 categories and 14 codes were generated. The 6 major-categories were: "feeling towards her daughter", "physical disorder", "living situation of her family", "limitation of the living environment", "lost opportunities to go out with friends" and "perception towards photography".

[Discussion]The analysis result shows that along with being constrained to live in the nursing care center due to her physical deterioration and change in living situation of her family, the client was placed in a position where she had to depend on her daughter. Her feeling of hesitation became stronger as she cared more about the daughter. Along with that progress, photography seemed to have become less prioritized. Additionally, the client had used photography as a tool to be involved in occupation, interacting with friends, and to express her own perception in the past. However in today's environment, because of all the changes in the situation, it turns out that the opportunities to be a part of the society is lost too. It is not easy to demonstrate how important photography is for the client occupationally, but from the result, it is understood that photography as an occupation is not as important to her as it used to be in the past.

共通の理解地平を創り出すことで一步を踏み出した事例

—やっと口にしたクライアントの想い—

鈴木 則世¹⁾，西野 歩²⁾

1) よみうりランド慶友病院，2) 専門学校 社会医学技術学院

【はじめに】Clark (1999) は作業科学者としての自分の視点と、クライアントである Richardson の障害体験をめぐる物語の視点の融合を試み報告している。彼女は Richardson との間に「共通の理解地平」を確立させようと努めた。共通の理解地平とは、セラピストとクライアントそれぞれの地平（観点）をお互いが理解し、共有し、次に進むための協働関係を築くことと著者は解釈している。

意味のある作業の大切さや作業の意味を知ることの重要性などが周知されてきている。今回、作業についての聴取が困難であったクライアントに出会った。そこで、共通の理解地平の確立を目指し関わった結果、作業について語り合い、役割の再獲得に至った事例を経験したのでここで報告する。尚、本報告をするにあたり同意を得ている。

【事例紹介】A 氏 80 代女性、介護困難により療養型病院に入院し、家族の来院はほとんどなかった。認知症、うつ病、脳梗塞後遺症を呈していた。農家が多い地域で生まれ育ち、結婚後は呉服店・銭湯の番台など人と関わる仕事をしてきた。当初、表情は常に硬く、声をかけても目が合うことはなかった。スタッフがパズルや手芸を勧めても「なにもできなくなってしまった」と拒否をし、作業療法の時間以外は、カウンターの隅で下を向き過ごしていた。意思表示をすることが少なかったため、スタッフから作業を選択する機会を与えられず、人との関わりも少なく、受身的な生活を送っていた。夕方になると不穏になり落ち着かないことが多かった。

【経過】担当開始時、「A 氏の過去・現在の作業」の聴取を試みたが、A 氏は下を向いたまま終始「わからない」という返答だった。そこで、「A 氏はどんな人だったのか」をカルテの情報から憶測することにした。「農家が多い田舎で生まれ育ち、結婚後は人との関わりが多い仕事をしてきた」などの情報から「本当の A 氏は人と関わるのが好きなのではないか」と仮説をたて、共通の理解地平の確立を目指し関わった。お互いを理解し合い、自然に関われる関係を構築するために、意識的に日頃の話や傾聴、共感を行い、時には著者自身の話もした。次第に、目が合う回数・笑顔・会話が増え、また、著者が仲介することで他のクライアントやスタッフとの交流も増加した。

そこで、再度「A 氏の過去・現在の作業」を聴取した。前回と違い A 氏は「昔はよく近所の人と野菜をあげたりもらったりしていた」「昔、家に大きな仏壇があった」といったストーリーを初めて語った。また、その過程で「職員の皆さんにお礼がしたい」「仏さんにお線香をあげたい」という A 氏の想いも表出された。そこで「なぜ行いたいのか」の聴取をすると「日頃お世話になっているし、田舎ではお礼をすることは当たり前だった」「昔、祖母や母と毎日仏壇の掃除をし、お線香をあげることが日課だった」といったことを語った。そこで、A 氏と「どのように行うか」の検討をし、メッセージカード作成やリハビリ終了時の挨拶、仏壇の掃除を不安が強くなる夕方に行った結果、その作業が習慣化し、「お礼をする人・仏壇の掃除をする人」といった役割の再獲得に至った。

【考察】福田 (2011) は、意味のある作業は、生活やアイデンティティの再構成に重要であり、作業再開を促進する要因となると述べている。今回、「著者と作業について語る」という A 氏の作業は、A 氏の過去と現在のストーリーをつなぎ、「お礼をする・仏壇の掃除をする」という作業再開を促進させたのではないかと考えられる。

また、Clark (1999) は、クライアントにとって最も関心のある出来事が詳しく話され、重視されるためには、話の内容は自発的な形で表れるべきだと述べている。今回、共通の理解地平の確立を目指し関

わったことは、作業の聴取が困難な A 氏が自発的に関心事を表出することを可能にした 1 つの理由と考えられる。また、A 氏がどのような作業的存在だったのかを、文化的背景や経験した職業などから理解しようと試みたことは、「人と関わるのが嫌いなのではないか」という A 氏に対しての先入観を排除し、お互いの理解・協働関係を促進し、共通の理解地平の確立に影響を与えたと考察できる。そして、その過程から作業ストーリーテリングを行うことで、A 氏の想いを達成するための作業療法につながったのではないだろうか。

Poster Session Room B

An Example of Moving Forward by Creating the Horizon of Understanding: Thoughts About a Client Who Eventually Talked

Noriyo Suzuki¹⁾, Ayumi Nishino²⁾

1) Yomiuri Land Keiyu Hospital, 2) Japanese School of Technology for Social Medicine

Introduction Clark (1999) described her attempt to combine her perspective as an occupational scientist with that of a client, Richardson, based on Richardson's accounts of her experience recovering from a disability. Clark strove to find "the horizon of understanding" with Richardson. As Clark saw it, the horizon of understanding is when the therapist and client understand each other's perspective and they collaborate to help the client move forward.

The importance of a meaningful occupation and the importance of ascertaining the meaning of an occupation are familiar concepts in occupational therapy. The current case report describes difficulty soliciting information about occupations from a client. An attempt to find the horizon of understanding resulted in a discussion of occupations and led to the client redefining her role, as reported here. Consent was obtained for this case report.

Case Presentation Ms. A, a woman in her 80s, was admitted to a convalescent hospital due to difficulties with her care. Ms. A presented with dementia, depression, and sequelae of cerebral infarction, and her family seldom visited her. Ms. A had grown up in a heavily agricultural region, and after marrying she worked with people as a clerk at a kimono fabrics shop or as an attendant at a public bath. Initially, Ms. A's expression was continually stilted and she would not establish eye contact when addressed. Staff suggested jigsaw puzzles and handicrafts, but Ms. A refused, saying "I can't do anything anymore." Outside of occupational therapy, Ms. A would sit at the end of counter seating looking down. Ms. A seldom expressed her wishes, so staff gave her few opportunities to choose an activity. Ms. A had little involvement with others and she lived a passive existence. In the evenings, she would often grow restless and would not settle down.

Course Upon taking over Ms. A's case, the therapist attempted to solicit "Ms. A's previous and current occupations," but Ms. A constantly responded "I don't know" while continuing to look downward. Thus, "the sort of person that Ms. A was" was surmised based on information from her medical chart. Based on information such as the fact that she "grew up in the country surrounded by farming" and that "she worked a lot with people after marrying," Ms. A was assumed to "like being involved with people" at that time, so an attempt was made to find the horizon of understanding. The therapist deliberately talked about everyday topics and listened closely in order to communicate with Ms. A and spontaneously create a relationship. The therapist empathized with her and occasionally talked about her own experiences. Gradually, Ms. A gradually increased eye contact, she smiled more, and she talked more. With the therapist acting as an intermediary, Ms. A increasingly conversed with other clients and staff.

Ms. A was again asked about her "previous and current occupations." Unlike before, Ms. A began telling her story, explaining how "In the old days, we would often give and get vegetables from neighbors" and "In the old days, our house had a big family [Buddhist] altar." In the process, Ms. A expressed her feelings, saying "I want to thank all of the staff here" and "I want to light sticks of incense for the deceased." When asked "Why do you want to do that?", she explained that "I'm in their debt every day, and in the countryside being courteous was a given" and that "In the old days, the daily routine was to clean the family [Buddhist]

altar every day with my mother and grandmother and light sticks of incense.” The therapist explored ways for Ms. A to “do those occupations,” such as writing a card with a message, saying goodbye at the end of rehabilitation, and cleaning the family [Buddhist] altar in the evening, when she was most anxious. As a result, these occupations became habitual, leading Ms. A to redefine her role as “a person who is courteous and who cleans the family [Buddhist] altar.”

Discussion Fukuda (2011) stated that a meaningful occupation is crucial to reconfiguring one’s life and reconstituting one’s identity, and that such meaning in turn encourages a resumption of that occupation. In the current case, Ms. A’s “discussion of occupations with her therapist” may have fused Ms. A’s previous and current stories, encouraging her to resume occupations, i.e. “being courteous and cleaning the family [Buddhist] altar.”

In addition, Clark (1999) stated that stories should spontaneously take shape, with clients talking about and emphasizing the events that they are most interested in. In the current case, the attempt to find the horizon of understanding is a possible reason why Ms. A spontaneously expressed interest despite initial difficulty soliciting a response about occupations from her. In addition, an attempt was made to understand Ms. A’s operational existence based on her cultural background and work experience. Doing so eliminated preconceptions about Ms. A, such as that “she probably hates being involved with other people,” and it encouraged mutual understanding and collaboration. This affected the search for the horizon of understanding. Occupational storytelling via that process is what probably facilitated occupational therapy in which Ms. A expressed her thoughts.

意味ある存在であり続けるために適応を支援する

～適応ストラテジーから末期がんのクライアントを理解する～

渡邊立志¹⁾，港美雪²⁾

1) 津島市民病院，2) 愛知医療学院短期大学

【はじめに】日々の生活において，人は自らの生活の質を高めるために，絶えず変化していく環境の中で，作業を選択し，生活を組織化する過程を経験している¹⁾。クライアント（以下，CL）が意味ある存在であり続けることを支援する作業療法士にとって，適応の過程における適応ストラテジーについて理解を深めた上で実践に取り組むことは課題の一つである。そこで本発表では，適応ストラテジーに関する作業の知識を深め，CLの作業的状况について，適応ストラテジーから理解し，作業療法実践につなげた経験を報告する。本報告に際し，CLに十分な説明を行い紙面上にて同意を得た。

【CL 紹介】A 氏，60 歳代男性。配送業事務員。仕事内容は配送荷物バーコード読み取りと後輩育成。趣味は水彩画・デッサン・書道・写経で，妻と二人暮らし。肺がん StageIV で脳転移あり。

【適応ストラテジーに関する知識（作業科学）】Jackson は，作業療法士の主要な目的を個人が意味ある存在であり続けることを可能にし，創造的な適応を支えることであるとし，適応ストラテジーに関する知識を探究した²⁾。その結果，毎日の作業的主導権を維持し，有意義な日常的経験を築くための適応ストラテジーとして，自己決定とコントロール，個人の人生にとって意味のあるテーマに沿った，挑戦しているという感覚を得られるような作業の選択が，生活を左右する要因として明らかにした。

【作業科学を実践につなげる】＜作業に焦点を当てた評価＞作業療法面接にて，働くことが CL にとって役割を得て挑戦的な意味をもつ作業であり，趣味活動が自分らしさを表現し，ストレスを解消する効果のある作業であったが，現在は困難な状態だと語った。これは，CL にとって挑戦的でリスクのある作業ができず，日常生活内の時間的リズムが乱れ，作業をコントロールする機会を奪われていた。その結果社会的・空間的な連続性が断たれアイデンティティを喪失した状態となっていた。CL は働くことに挑戦したい思いとリスクを恐れないことを面接時に語ったが，環境的・身体的制限により困難な状況となっていた。＜介入方法・経過＞CL にとって重要な意味を持つ作業を生活内でコントロールし，自分らしい生活の再獲得を目標とした。作業療法にて趣味活動をする機会を設け，入院生活内で作業が選択できる環境を整えた。さらに，作業に従事している時の主観的体験を言葉にすることで作業の効果を実感し，生活内で作業を時間的にコントロールする練習を重ねた。同時に働くために必要な交通手段の決定とバーコードの読み取りを経験し，挑戦的な作業に目を向けることを意識した。その結果「不安な時に写経や絵を描いていると気分が落ち着き，嫌なことを考える割合が少なくなった」という気づきが得られ，外出時に職場へ赴き現実的な復職に向けて考え始めていた。

【考察】CL は意味ある存在としていること困難だったが，作業療法介入により重要な作業を生活内に再度織り込むことでコントロールし，挑戦的な作業に目を向けられている感覚を得ることができたと考えられる。作業科学の知識から CL の現状を整理し理解することで，限られた時間の中で生きる人にとって自分らしく生きるための 1 つの方法を提示してくれた。また，がんを患った CL が適応していく過程やその要因を知ることで，新たな適応ストラテジーが発見できるのではないかと考える。

【文献】1) Frank, G. (永井洋一・訳) (1999). 適応の概念—作業科学研究の基礎—. In Clark, F & Zemke, R. (Eds.) (佐藤剛・監訳), 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店, pp. 53 – 62.

2) Jackson, j. (小田原悦子・訳) (1999). 老年期に意味ある存在を生きる. In Clark, F & Zemke, R. (Eds.) (佐藤剛・監訳), 作業科学—作業的存在としての人間の研究. 三輪書店, pp. 373 – 395.

Poster Session Room B

Supporting Adaptation to Continue Being Meaningful Existence

~ Understanding the Client of the Terminal Cancer from an Adaptation Strategy~

Ryuji Watanabe¹⁾, Miyuki Minato²⁾

1) Tsushima city Hospital , 2) Aichi medical care junior college

【Introduction】 We deepen knowledge of the occupation about the adaptation strategy and understand the situation of the client from an adaptation strategy and report the experience that we connected with occupational practice.

【CL Information】 Two people with the wife live on a delivery religion office worker of men in 60s. The hobby copies a sutra with a watercolor and a sketch and calligraphy. It is StageIV of lung cancer and makes brain metastasis.

【Knowledge about the Adaptation strategy】 Jackson shows seven categories as an adaptation strategy.

【connecting occupational science with practice】

<The evaluation that focused on occupation> It was occupation to have a defiant meaning with a role for CL to work in an occupational interview, and hobby activity expressed a quality of oneself and was the occupation that there was an effect in to relieve stress, but told that it was in condition that there was not it now. Is defiant, and is risky for CL; time rhythm in the everyday life was disturbed without being able to occupation, and was robbed of opportunity to control occupation. As a result, it was in a condition that social space-like continuity was cut off and lost identity. The CL became in a difficult situation by an environmental physical limit. <method/ results> The occupational goal controlled work in life and assumed it reacquisition of the life like oneself. Furthermore, we realized the effect of the perilla for a term in a subjective experience and repeated exercises to control occupation in terms of time. We were aware of paying more attention to defiant occupation at the same time. As a result, the impression "that mood calmed down, and did not think an unpleasant thing to make copying of a sutra and a sketch" was obtained.

【Discussion】 The CL had difficulty in being meaningful existence, but it was controlled with occupational intervention by incorporating important occupation again before life and was thought to be able to obtain a sense paid more attention to for defiant occupation. It seemed to be oneself and showed one method to live for the person who lived in limited time by arranging it, and understanding the present conditions of the CL from occupational scientific knowledge. Also, we think that we may discover a new adaptation strategy when a process and the factor that we occupation, and the CL which suffered from a cancer fits are found.

作業に焦点をあてた介護予防プログラムの成果

—作業に関する不安アンケートの結果より—

伊藤文香¹⁾，齋藤さわ子¹⁾，角田由布子²⁾，柴佳代子³⁾，金野達也⁴⁾，岩井和子¹⁾

1) 茨城県立医療大学，2) 結城市健康増進センター

3) 結城市地域包括支援センター，4) 茨城県立医療大学付属病院

【はじめに】地域高齢者を対象とするコホート研究においては、軽微な心理的苦痛状態でも、死亡や要介護認定リスクは有意なリスク上昇が認められており¹⁾、日常生活の不安の軽減は、介護予防において重要な視点である。日本政府は、「超高齢化社会の日本において、地域在住の高齢者に対する予防的な取り組み、地域で自立してその人らしく過ごせる支援が重要である。」とし、介護予防事業を強化している²⁾。今回、茨城県結城市との協働により、「作業に焦点をあてた教育プログラムによる介護予防プログラム」の開発を試みた。本研究の目的は、この作業に焦点をあてたプログラムが日常生活の不安軽減に効果があるかについて検討することであった。

【プログラム内容】1教室あたりのプログラム回数は、10回であり、1回約90分である。先行研究³⁾をはじめとする作業療法におけるヘルスプロモーションの知見や研究結果、作業科学の知識をもとにプログラムは構成した。プログラムの内容は、より安全で効率の良い作業の方法の提供(便利グッズの紹介、電子レンジ料理など)、日常作業における痛みの予防と対策、作業と健康に関する知識の提供し、過去や将来の作業について自己省察を促す等である。参加者のニーズを講習会中に把握しながら、参加者の大多数に有益なプログラムになるようにプログラム内容は実施中にも調整しながら行った。

【対象者と方法】プログラム参加者は、2次予防事業該当者であり、郵送、電話及び訪問にて「介護予防教室」への参加の勧めに応じたものであった。平成25年6月～12月の期間に、プログラムに参加した対象者31名のうち、プログラムに7回以上参加し、アンケート回収が可能であった26名(男性4名、女性22名：平均年齢76.5±4.9歳)であった。対象者には、プログラム開始前後に作業不安アンケートを実施した。作業不安アンケートは、作業に対する不安(セルフケア・自宅での生活関連活動・社交的活動・余暇活動・外出を伴った生活関連活動に対する不安、全般的な不安)について4件法(不安なし～大変不安)で回答してもらった。プログラム実施前後で各アンケート項目に関して集計した。また、介入前後における不安の変化(不安軽減、不安変化なし、不安増加)の人数を集計し、回答比率を算出した。なお、本研究は、茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施され、対象者からデータの使用および発表に関して同意を得た。

【結果】データ分析の結果は、表1に示した。

表1：介入前後の不安の変化の人数

	不安軽減	不安変化なし	不安増加
一般的不安	n=9 (34.6%)	n=13(50.0%)	n=4(15.4%)
セルフケアに関する不安	n=8 (30.8%)	n=10(38.5%)	n=8(30.8%)
自宅での生活関連活動に関する不安	n=11(42.3%)	n=9(34.6%)	n=6(23.1%)
社交的活動に関する不安	n=10(38.5%)	n=11(42.3%)	n=5(19.2%)
余暇活動に関する不安	n=9 (34.6%)	n=11(42.3%)	n=6(23.1%)
外出を伴った生活関連活動に関する不安	n=10(38.5%)	n=11(42.3%)	n=5(19.2%)

【考察】全般的不安について軽減する人が多く、本プログラムが高齢者の日常生活の不安の軽減に効果がある可能性があると考えられた。各活動領域別では、自宅での生活関連活動・社交的活動におい

て、不安が軽減した人が多かった。これは、電子レンジ料理や家事に関する便利グッズの紹介など生活関連活動に直結した内容や、社会交流に関わる作業と健康に関する知識提供やグループディスカッション、茶話会などが社会交流を促す介入であったためと考えられる。また、各活動領域における不安で増大した人の約1/3～1/5の人が開始前に4点(不安なし)をつけた人であった。不安に関する認識の基準が変化したことも考えられるが更なる分析、検討が必要である。

- 1) 辻一郎：介護予防サービスの効果評価に関する研究．厚生労働科学研究費補助金総合研究報告書．2011
- 2) 介護予防マニュアル(改訂版)．介護予防マニュアル改訂委員会．2012
- 3) Clark F et.al : Occupational therapy for independent-living older adults. A randomized controlled trial.JAMA. 278(16) 1321-1326,1997

Poster Session Room C

Effectiveness of an Occupation-Focused Program for Preventive Long-term Care Service for Anxiety

Ayaka Ito¹⁾, Sawako Saito¹⁾, Yuko Tunoda²⁾, Kayoko Shiba³⁾, Tatsuya Kaneno⁴⁾, Kazuko Iwai¹⁾

1) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

2) Yuki city health promotion center

3) Yuki city Community General Support Center

4) Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital

【Introduction】 A cohort study for community-dwelling elderly showed that emotional distress led them to higher risk of death and/or in a needed long-term care. Therefore, reducing their anxiety in daily life is assumed an important aspect for preventing a needed long-term care. We had an opportunity to develop an educational program of preventive long-term care service with Yuki city in Ibaraki prefecture. The program was focusing on daily occupation of participants. The purpose of this research was to examine the effectiveness of the program for reducing anxiety in their daily life.

【The content of the program】 The program was consisted of 10 sessions (approximately 90 minutes per session). The design of the program was based on previous studies of occupational science, occupational therapy, and health promotion. After we took participants' needs during the sessions, we modified the program to fit the majority of participants.

【Method】 The participants were 26 people who were qualified as 2nd degree of preventive care and participated more than 7 sessions. A questionnaire for anxiety was implemented before and after the program start. The first part of the questionnaire asked them their general anxiety in their daily life with 4-point scale (no anxiety=4~great anxiety=1). The second part of the questionnaire asked about their occupational anxiety which was consisted of five areas such as self-care, household at home, social activities, leisure activities, activities doing outside) with 4-point scale (no anxiety=4~great anxiety=1). Data analysis was to calculate the number of the people who changed their anxieties.

【Result】 The results of the data analysis were shown in Table 1.

Table 1 : The number of people changed their anxieties before and after the intervention

	Decreased	No changed	Increased
General anxiety	n=9 (34.6%)	n=13(50.0%)	n=4(15.4%)
Anxiety for self-care	n=8 (30.8%)	n=10(38.5%)	n=8(30.8%)
Anxiety for household	n=11(42.3%)	n=9(34.6%)	n=6(23.1%)
Anxiety for social activities	n=10(38.5%)	n=11(42.3%)	n=5(19.2%)
Anxiety leisure activities	n=9 (34.6%)	n=11(42.3%)	n=6(23.1%)
Anxiety for activities of doing outside	n=10(38.5%)	n=11(42.3%)	n=5(19.2%)

【Discussion】 The results showed that there were tendency of decreasing anxieties in their daily life on both general and occupational between before and after the program, especially for general, household's, and social activities' anxiety. It is indicated that the program was effective for reducing participants' anxieties. The reasons of decreasing anxiety for household could be that the program included the sessions introducing useful goods for household and practicing microwave cooking by using useful cooking goods. The reasons of decreasing anxiety for social activities could be that participants were encouraged during program to interact with each other. In addition to those, they were lectured the knowledge of the relationship between

occupation and health including important roles of social activities. Approximately 1/3 to 1/5 of people who increased their anxiety on occupational anxiety questionnaire gave 4 (no anxiety) before the program. It might be that they started to face their aging and to consider to how to cope with the emerging problems in their future by aging. It is necessary to continue further analysis.

介護予防事業における挑戦したい作業に焦点をあてたアプローチの効果

横井 賀津志, 藤井有里, 酒井ひとみ

関西福祉科学大学

【はじめに】生産的で意味ある作業を育むことは、自立性を最大限に高め、生活機能を拡大し、人の健康維持に役立つ。健康高齢者においても、Well Elderly Studyにより、作業に関する教育、情報収集および実践の過程が生活満足度やQOLを向上させた(Clark 他, 1997)。しかし、高齢者が新たに挑戦したい作業に焦点をあてた介入による健康への影響を確認した研究は少ない。本研究の目的は、地域在住高齢者を対象に、挑戦したい作業に焦点化したプログラムと脳機能に焦点をあてたレクリエーションプログラムを比較し、認知機能改善とQOL向上などの健康維持へ効果を確認することである。【方法】市の認知症予防事業への参加を希望した33名に研究募集し、認知症を有する3名を除いた30名に研究の同意を得てランダム化し、介入群15名(本人が挑戦したい作業を遂行する群)と対照群15名(作業療法士が設定した脳機能に着目した集団レクリエーション群)に割り付けた。介入群は、1)認知症予防の理解を深める作業に関する講話、2)作業歴の記入、3)自身を定義する作業の列挙、4)COPMを用いた挑戦したい作業の列挙と決定、5)挑戦する作業の具体化、6)作業の遂行と報告の6つの過程を集団と個別の組み合わせで実施した。介入期間は両群とも5ヵ月間で、集団で月1回の教室を計5回実施した。結果指標は、挑戦したい作業と結びついた人数と主観的意見、注意機能スクリーニング検査(D-CAT)と主観的健康感を測定するSF36、ファイブコグ検査のIADL評価を用いた。統計処理は2元配置分散分析で交互作用(群×時間)を確認し、介入前後の比較を対応のあるt検定で行った。

【結果】基本属性は、外出頻度のみ対照群で有意に多かった。介入群の内11名(73%)が新たな作業に挑戦できた。挑戦できた参加者からは「生活に張りが出てきて、時間を気にするようになった」、「昔に戻った気持ちになれた」、「仲間が増えた」、「挑戦してみると意外とできた」など肯定的な意見が多かった。一方、対照群では新たな作業を始めた者はいなかった。IADLとSF36の日常役割機能(精神)においては、有意な交互作用が認められ、介入群で有意に向上した。注意機能では、介入群において介入後に注意の選択や持続の値が有意に高かった。

【考察】対照群と比較して、介入群では多くの高齢者が挑戦したいと思っていた作業と結びつき、挑戦した作業の形態や機能、意味に関する肯定的な意見が聞きとれた。さらに、挑戦した作業はIADLと精神面の健康感QOLを向上させ、注意機能をも刺激した。介入群において、作業歴と本人を定義づける作業、作業の具体化の過程では、常に、参加者は作業療法士と作業分析(形態・機能・意味)を共有した。この結果、参加者は自身の作業へのこだわりを気付くようになった。さらに、介入初期に行った作業歴記入では、幼少期からの作業を振り返り、参加者個人の作業に対する価値観を意識付けた。これらの過程から、参加者に作業的存在を意識付けることができた。このことは、参加者が発した「これまで積み重ねてきた作業によって今があることに改めて気づいた」との意見からも確認できる。挑戦したい作業は、COPMの重要度を基にして、グループワークにより、他の参加者からの意見を参考に自己決定できた。作業へのこだわりの認識、作業的存在の保障、作業の自己決定により、高齢者が新たな作業に挑戦できたと考える。新しい作業の遂行は、当然ながら注意の配分能力や計画性など前頭葉を中心とした認知機能を必要とし、注意機能を向上させた。そして、新しい作業に挑戦した結果、高齢者はその作業の形態、機能、意味を肯定的に感じとり、QOL向上にもつながった。高齢者が挑戦したいと思っている作業と結びつくことは、作業自体の変化を肯定的に感じ取り、認知機能やQOLを向上させ、健康維持に貢献できる可能性が高い。

文献：

Clark F., Azen SP., Zemke R., Jackson J., Carlson M., Mandel D., Hay J., Josephson K., Cherry B., Hessel C., Palmer J., Lipson L. (1997). Occupational therapy for independent-living older adults. A randomized controlled trial. *the journal of the American Medical Association*, 278(16),1321-6.

The Effect of the Approaches With Focus on Engagement in the Challenging Occupations in the Care Prevention Service

Katsushi Yokoi, Yuri Fujii, Hitomi Sakai
Kansai University of Welfare Sciences

Introduction: Being engaged in a productive and meaningful occupation maximizes one's independence, enhances living functions, and assists in the maintenance of good health. According to the Well Elderly Study, education, gathering of information, and practicing an occupation improved life satisfaction and quality of life (QOL) among healthy, elderly individuals (Clark et al., 1997). However, there are not many intervention studies on the health effects of elderly individuals that focus on the occupations that they want to try. The purpose of this study was to compare the program that focus on engagement in the challenging occupations with the recreation program that focus on brain functions and to confirm the effect of maintaining health such as improvement in cognitive function and QOL.

Methods: Thirty-three individuals who expressed interest in participating in a municipal care prevention service were recruited for this study. After receiving consent for participating in the study, the remaining 30 participants were randomized into either an intervention or a control group. The 15 participants in the intervention group were engaged in their occupation of interest while the 15 participants in the control group were involved in a recreational group activity that focused on brain functioning selected by an occupational therapist. The intervention group went through the following six-step process, combining group and individual activities: 1) lecture to deepen understanding of dementia; 2) recording occupational history; 3) listing occupations that define oneself; 4) listing and choosing an occupation to challenge using the COPM; 5) materializing the occupation of interest; and 6) implementing and reporting on the occupation. The intervention period for both groups was 5 months; in other words, the once-a-month group activity was conducted a total of five times. As outcome measures, we used i) the number of participants who became engaged in their occupation to challenge as well as their subjective opinions, ii) the Digit Cancellation Task (D-CAT) screening test for attention, iii) the Short Form 36 (SF36) and iv) IADL. Statistical processing using two-way ANOVA revealed an interaction effect (group \times time).

Results: In the intervention group, 11 participants (73%) were able to try a new occupation. Many participants who tried a new occupation gave positive feedback such as: "life has become rewarding and I am more conscious of time", "I was able to feel as if I went back in time", "I made more friends" and "once I tried, I was unexpectedly able to do it". In contrast, participants in the control group were not able to engage in a new occupation. A significant interaction effect was observed in role emotional of SF36 and IADL. Furthermore, the sustained and selective attention after intervention was significantly higher in the intervention group.

Discussion: Many elderly individuals in the intervention group were able to engage in their occupation to challenge and gave positive feedback on the form, functions and meaning of the occupation that they tried. The occupation that they tried improved their IADL and the emotional aspects of health QOL while also stimulating their attention function. The participants in the intervention group always worked in partnership with an occupational therapist to analyze the occupations during the process of recording occupational history, listing the occupations that define themselves and materializing their occupation to challenge. As a result, the participants became aware of their particular interest in the occupation. Through this process, we

were able to make the participants aware of occupational being. This fact was confirmed by the following feedback from one participant: "I realized that the present is built on the accumulation of past occupations". The elderly individuals were able to engage in a new occupation through recognition of their particular interest, security of occupational being, and self-selection of the occupation. The implementation of a new occupation obviously requires frontal lobe-based cognitive functions. The elderly individuals positively perceived the form, function, and meaning of the occupation, leading to an improvement in QOL. The engagement of elderly individuals in their occupation of interest leads to a positive perception of changes in the occupation itself, improves cognitive function and QOL, and will most likely contribute to maintaining good health.

Reference: Clark F., Azen SP., Zemke R., Jackson J., Carlson M., Mandel D., Hay J., Josephson K., Cherry B., Hessel C., Palmer J., Lipson L. (1997). Occupational therapy for independent-living older adults. A randomized controlled trial. *the journal of the American Medical Association*, 278(16),1321-6.

アスリートのセカンドキャリア支援の在り方：

作業科学的視点からの文献レビュー

金野 達也^{1) 2)}，齋藤さわ子³⁾

1) 茨城県立医療大学付属病院 作業療法科

2) 茨城県立医療大学大学院 博士後期課程 保健医療科学専攻

3) 茨城県立医療大学 保健医療学部 作業療法学科

1. はじめに

アスリートにとって、競技引退後のセカンドキャリア獲得は、長い時間と労力をかけてきたスポーツの代わりとなる作業を獲得するための重要なライフイベントである。しかし、様々なセカンドキャリア支援が試みられているものの十分ではないことが指摘されている。そこで、本研究の目的は、日本国内のセカンドキャリア問題に関する文献レビューを実施し、作業の視点からアスリートのセカンドキャリアの問題を捉え、作業の視点からのセカンドキャリア支援の可能性の示唆を得ることとした。

2. 方法

対象文献の検索は、コンピューターのデータベース検索とハンドリサーチで実施した。コンピューター検索は、「医学中央雑誌Web版」と「メディカルオンライン」にて行った。対象年は、日本でセカンドキャリア支援が開始され始めた2002年～2014年とした。検索語は「アスリート」「スポーツ」「セカンドキャリア」「引退」を組み合わせで実施した。ハンドリサーチは文献中の引用文献について検索した。分析対象はセカンドキャリアに関する記述がある文献とし、総論や会議録は対象文献とはせず、参考資料として使用することとした。文献の選択は、第一筆者が抽出された文献の抄録をスクリーニングし、選択基準に合致した文献を選択し、タイトル・目的・要約からカテゴリー化する事とした。

3. 結果

セカンドキャリアに関する記述があった論文は18論文があり、うち8論文が総論、10論文が対象となり、「セカンドキャリア支援の現状」2論文、「引退後の生活の質に関連する要因」7論文、「引退後の生活への適応」4論文に分類できた。「セカンドキャリア支援の現状」では、国内・国外のセカンドキャリアの現状と問題について報告されており、国内の支援の遅れが指摘されていた。「引退後の生活の質に関連する要因」では、キャリア発達・年齢・スポーツキャリアの達成感・教育歴・スポーツキャリアの中断・アイデンティティー・自信が、引退後の生活の質に影響する要因として挙げられた。「引退後の生活の適応」では、心理社会的サポートやセカンドキャリアのための事前準備が、競技引退後の生活の適応にどのように影響するかについて報告されていた。

4. 考察

いずれの論文も、引退前後のアスリートの作業の状態を分析し、セカンドキャリアとの関係を表したものはなく、また作業を視点に多角的な支援をした、あるいはそれが伺われた記載はなかった。特に以下の点で、作業を中心とした支援がアスリートのセカンドキャリアを促進できる可能性が考えられた。スポーツキャリアを活かす支援は重要であるが、そのスポーツを継続して行う、あるいは指導するという様な作業形態的な視点からの支援が多く、「引退後の生活への適応」でも適応例はそうした形態的に一致している支援例が多かった。そのスポーツに対するアスリートの信念・価値・個人的意味を反映する様な作業との結び付けへの支援については記述がなく、着目されていないのが現状といえる。また、アスリートが現役時代その競技に対する作業の機能的側面について分析し、どの作業の機能的側面が失われる事が最もそのアスリートにとって心理的ダメージが大きいかを把握し、どの作業へ結びつけば作業の機能が維持されやすいかという視点をもった支援の記述がなく、これらの点で支援の余地が残されていると言える。

Second Career Support for Athletes:

Literature Review from the Standpoint of Occupational Science

Tatsuya Kaneno^{1) 2)}, Sawako Saito³⁾

1) Graduate School of Health Sciences, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

2) Rehabilitation Dept Ibaraki Prefectural University of Health Sciences Hospital

3) Occupational Therapy Department, Ibaraki Prefectural University of Health Sciences

1. Introduction

Second career support is an important life event for those athletes who wish to acquire a new occupation following their career in sports. Though the types of second career supports provided are varied, previous studies highlight that they were not sufficient in helping athletes acquire a new occupation. The purpose of this study was to review second career support for athletes from the standpoint of occupational science.

2. Method

The search strategy initially involved the use of the following electronic databases: (1) Japan Medical Abstracts Society and (2) Medical Online. This study reviewed second career support provided after 2002, which was the start of second career support in Japan. Keyword combinations used included “athlete,” “sports,” “second career,” and “retirement.” Additional literatures were subsequently gathered through reading the reference lists of the articles obtained via the database searches. Inclusion criteria for this study were as follows: (a) related to athletes’ second career support; (b) not a general statement or conference minutes; and (c) written in Japanese. We classified the literatures gathered according to title, purpose, and abstract.

3. Result

A total of 18 relevant studies were retrieved though 8 were discarded as being general statements. We categorized the 10 acceptable literatures into the following three themes. Two studies identified “current second career support” and explained the present situation and future prospects, noting that Japanese second career supports were delayed in comparison with international efforts. Seven studies identified “factors related to the quality of second career,” and revealed that career development, age, sports career achievement, educational status, drop-out, identity, and confidence were associated with the qualities that athletes sought in a second career. Four studies identified “life adaptations during the second career” and indicated how pre-retirement planning and psychosocial support affect the qualities of an athlete’s second career.

4. Discussion

This study indicated that occupational-centered intervention could facilitate second career transitions. However, no research associated with second career was found to analyze occupational status before and after retirement, or how occupational science could support athletes. While there was evidence of support from the standpoint of occupational form, no supports were seen from the standpoint of occupational meaning, such as athletes’ beliefs and values. In addition, there was no evidence of support from the standpoint of occupational function, such as knowledge to analyze and provide support for various factors that affect psychological stress.

新聞投稿から知る広島県における高齢者にとっての意味ある作業

徳毛幹子¹⁾，吉川ひろみ²⁾

1) 阿品土谷病院 2) 県立広島大学保健福祉学部

目的：国内外の研究において，作業に焦点を当てたプログラムが高齢者の健康に寄与すると報告されている。本研究の目的は，広島県の高齢者にとっての意味ある作業を知ることである。高齢者が自らの作業を主体的に発信しているメディアの内，広島県内で最も普及率の高い中国新聞の新聞投稿をデータとして用いた。投稿記事には意味ある作業が含まれていると考えたからである。

方法：2012年3月1日から2013年2月28日までの中国新聞の投稿欄に掲載された75歳以上の投稿者の記事461件を対象とした。各記事について，有馬の内容分析の方法を参考に，性別，年齢などの基本情報に加え，投稿者が行った作業と作業の意味を考えるための枠組みを参考としたカテゴリーとの関連性についてコーディングを行った。基本情報は，①掲載日②性別③年齢④タイトル⑤投稿者の作業⑥意見主張の有無とした。作業の意味を考察するカテゴリーは，①感情②人③思い出④時間⑤頻度⑥場所⑦物⑧自然⑨健康⑩社会とした。例えば，鳥に関する内容であれば⑧自然に関係ありとし，ありの内容は「鳥」とコーディングした。コーディングデータに基づき，該当項目数を数えた。

結果：記事数は，男性242件（52.5%），女性218件（47.3%）。複数回投稿者は，男性40名，女性23名で，最高28回だった。年代別では，70歳台が266件（57.7%）80歳台178件（38.6%）だった。人との関わりについて述べている記事は347件（75.3%）で，スポーツ選手，政治家など幅広い人とのバーチャルな関わりも含まれていた。「現在」の事柄について述べた記事が302件（65.5%），「現在と過去」は104件（22.6%）だった。作業頻度は，1回だけの作業が288件（62.5%）だった。記事の内容は，「社会」172件，「物」111件，「自然」95件が多く，「健康」は28件（6.1%）だった。投稿された作業の中で，社会参加もしくはレジャーに関する記事は247件（83.2%）だった。

考察：社会参加，レジャー，人との関わり，現在との関わりといった要素をもつ作業が，高齢者にとって意味のある作業となる可能性が高いと考えられる。社会とのつながりを維持すること，人生の連続性としての現在を重要視する傾向がある。こういった作業を通して，高齢者は安定感を味わっていると考えられる。本人にとって最も関心のある出来事が話され重視されるために，自発的に自然な形で現れるというストーリーテリングの効果が，新聞投稿という作業を通してなされているのかもしれない。投稿者は，新聞投稿という作業により，自らの活動の意味を振り返り，作業の意味を確認し，さらに自分の物語をつなげていると考えられる。

文献

有馬明恵（2007）．*内容分析の方法*．ナカニシヤ出版．

吉川ひろみ（2009）．作業の意味を考えるための枠組みの開発．*作業科学研究*，3，20-28．

Jackson, J.（小田原悦子・訳）（1999）．老年期に意味ある存在を生きる．In Clark, F.& Zemke, R.(Eds.)（佐藤剛・監訳），*作業科学—作業的存在としての人間の研究*．三輪書店，pp. 373-396．

Clark, F., Ennevor, B.L.& Richardoson, P.L.（村上真由美・訳）（1999）．作業的ストーリーテリングと作業的ストーリーメイキングのためのテクニックのグラウンデッドセオリー．In Clark, F.& Zemke, R.(Eds.)（佐藤剛・監訳），*作業科学—作業的存在としての人間の研究*．三輪書店，pp. 407-430．

Meaningful Occupations for Older People Living in Hiroshima: Analysis from Readers' Columns of a Newspaper

Mikiko Tokumo¹⁾, Hiromi Yoshikawa²⁾

1) Ajina Tsuchiya Hospital, 2) Prefectural University of Hiroshima

Purpose: Research in Japan and other countries showed that occupation-focused programs contribute to the health of older people. The purpose of this study was exploration of meaningful occupation for older people living in Hiroshima prefecture. Articles of readers' columns of a local newspaper, *Chugoku Shinbun*, were analyzed because the authors supposed that the articles included their meaningful occupations on a daily basis.

Method: Four hundred sixty-one articles written by people over 75 years old from March 2012 to February 2013 were analyzed as data. Each item of data was analyzed using a content analysis method (Arima, 2007). Coding items included background information, occupation and categories from the framework of meaningful occupation (Yoshikawa, 2009). The background information included date, sex, age, title, occupation, and opinion. The categories of meaning of occupation included emotion, persons, memorial episodes, time, frequency, places, materials, nature, health, and society. This is an example of coding. If there is a bird in the article, the category was nature then "bird" was written. Relevant categories are counted.

Results: There were 242 articles (52.5%) written by men and 218 (47.3%) articles written by women. Forty men and 23 women contributed more than twice. There were 266 articles written by people in their 70s and 178 articles written by people in their 80s. There were 347 (75.3%) articles related to athletes and politicians. There were 302 articles on current events and 104 articles on past and current events. There were 172 articles related to society, 111 articles related to materials, 95 articles related to nature, and 28 articles related to health. There were 247 (83.2%) articles related to social participation and/or leisure.

Discussion: Occupations related to social participation, leisure, persons, and current events may become meaningful occupations for older people. Keeping the relation to society and current events would be valued for older people. They may feel a sense of security through those occupations. Contributions to newspaper readers' columns may guide the effects of story-telling. Contributors of readers' columns may reflect their own activities and find the meaning of occupation and then make their life stories.

References

- Arima, A. (2007). *A Method of Content Analysis*. Nakanishiya Publications.
- Yoshikawa, H (2009). Development of a frame of meaning of occupations. *Japanese Journal of Occupational Science*, 3, 20-28.
- Jackson, J. (1996). Living a meaningful life. In Zemke, R. & Clark, F., ed. *Occupational Science: The Evolving Discipline*. F.A. Davis, Philadelphia. pp. 339-361.
- Clark, F. (1996). A grounded theory of techniques for occupational storytelling and occupational story making. In Zemke, R. & Clark, F., ed. *Occupational Science: The Evolving Discipline*. F.A. Davis, Philadelphia. pp. 373-392.

障害のある子どもの家族はどのように社会を経験するのか

～作業を通した母親の視点からの分析～

西方浩一^{1), 2)}, 小田原悦子²⁾

1) 文京学院大学, 2) 聖隷クリストファー大学大学院

【研究背景】人々の社会参加は、その健康状態に大きな影響を与え、生活満足や Well-being と密接な関係がある(Law, 2002). 一方、障害児家族における社会参加の困難さは、健康専門職の間で指摘され、そのような家族の状態は **Disabled family** と名付けられている(中根, 2007). 障害児家族がどのように社会参加を経験し、そのために作業がどのように使われているかを、Blumer の社会の概念を参考に母親の視点から探求したので報告する.

【目的】障害児の母親はどのように社会を経験し、社会参加のために作業を使うのかを理解する

【研究方法】3名の母親の手記と4名の母親のインタビューデータと参加観察からデータ収集を行った. Blumer のシンボリック相互作用論を参考にナラティブ分析を用い、母親の社会的交流過程における意味づけを解釈した. 信憑性・確実性を踏まえるため質的研究を実践する研究者グループにおいて、ピア・ディブリーフィングを実施した. さらにナラティブ分析に精通した研究者による監査を設けた. なお、本研究は、所属大学の倫理審査で承認された.

【結果および考察】本研究の母親たちは、障害児の誕生により、ライフクライシス（人生の危機）に直面し、そこから回復したことが理解された. 母親たちは、どのように生きたらよいか困惑し、周囲から孤立したが、同じ障害児の母親たちに会い、生き方のモデルを得て、障害児の育児に必要なスキルを習得し、新しく障害児の母親としての役割を獲得し、主体的に社会参加を果たした. この母親たちの経験は、van Genneep がライフクライシスの理論で見出した、分離、移行、再統合の3段階と同じ質の経験であると考えられた.

今回の発表では、母親の一人、加奈子（仮名）を例に、障害児の母親の経験と社会参加するためにどのように作業を使ったのかを説明する. 加奈子の経験した段階を、van Genneep にちなんで、分離、移行、再統合と名づけ以下に記す.

分離：思い描いていた子どものイメージと異なる我が子の誕生にショックを受けた. 当たり前に戻されてきた日常生活が急に進まなくなり、先の予測も立たなくなり、周囲の人との交流もうまくいかず、孤立した.

移行：明るくたくましく生きる障害児の母親たちに会い、前向きに考え、希望を持つように変わっていった. 同じ経験を持つ仲間との作業により、加奈子は自分の存在を肯定的にとらえ、安心感を持った. 加奈子は、専門家と子育てを共有することで、子どもとの生活の不安を軽減させた.

再統合：加奈子は、他の障害児の母親たちと主体的に集まり、周囲の人々に働きかけ交流し、障害児の育児や工夫、子どもとの生きる姿勢を後輩母親に伝えた. かつては受け入れられることで安心を得ていた加奈子たちが、社会に対して、わが子とわが家族の存在を発信した. 母親たちの活動は、障害児の将来のために社会変革を目指す、主体的社会参加（activism）に発展した.

Law, M. (2002). Participation in the occupations of everyday life, 2002 Distinguished scholar lecture. *American Journal of Occupational Therapy*, 56, 640–649.

中根成寿 (2007). コミュニティソーシャルワークの視点から「障害者家族」を捉える：障害者家族特性に配慮した支援にむけて. 福祉社会研究, 7, 37-48.

Oral Presentations II

Society as Experienced by Mothers of Children with Disability: Analysis of Occupations from the Mothers' Viewpoint

Hirokazu Nishikata^{1), 2)}, Etsuko Odawara²⁾

1) Bunkyo Gakuin University, 2) Seirei Christopher University

Introduction: Societal participation influences people's health and relates to their life satisfaction and well-being (Law, 2002). Health professionals realize that families of children with disabilities have difficulties with societal participation. A family with such a difficulty is called a disabled family (Nakane, 2007). This presentation, using Blumer's concept of society, investigates how families of children with disabilities experienced society and how they used occupation in their societal participation, from the mothers' perspective.

Purpose: To understand how the mothers experience society and use occupations through the process.

Methods: Data is collected from notes described by mothers and interview of mothers. Referring Blumer's Symbolic Interaction Theory, we conducted narrative analysis to understand the mothers' meanings in their social interactions. Peer debriefing and audit were applied. This research had IRB approval.

Results and discussion: Realizing disabilities of their children, the mothers faced with their life crisis. They were confused and felt isolated from others. The participants found new life model among positive mothers with whom they encountered. They succeeded in active participation in society. The mothers' experiences are identical to those in the processes of life crisis in van Gennep's theory: separation, transition and reincorporation. This presentation introduces one of the mothers, Kanako, as an example.

Separation: Kanako was shocked to see her new born baby because he was not what she had expected. She was no longer able to enjoy her life. She lost her hope for future and was isolated from others.

Transition: She met positive mothers who had children with disabilities and found a new hope. Engaging occupations with peer mothers made Kanako feel positive and safe. Sharing child care occupation with health professionals relieved her anxiety of parenting.

Reincorporation: Kanako formed a support group with other mothers and approached community to interact people. She shared with mothers how to take care children with disability and her living attitude with her child. Kanako only focused on being accepted by others in the past. However, she has started speaking out her family experience of child with disability. Kanako has developed a form of social activism focusing on social innovation for future of children with disabilities.

Key words: children with disability, mother, occupation, society, life crisis

Law, M.(2002). Participation in the occupations of everyday life, 2002 Distinguished scholar lecture. *American Journal of Occupational Therapy*, 56, 640-649.

Nakane, N. (2007). Understanding family with disabilities: Perspectives of community social work. *Study of Social Welfare*, 7, 37-48.

口述発表Ⅱ

社会参加前訓練：回復期リハ患者の経験に関する研究

小田原悦子¹⁾，柴田八衣子²⁾，溝部二十四²⁾，津田明子²⁾

1) 聖隷クリストファー大学，2) 兵庫県立総合リハビリテーションセンター中央病院

はじめに：回復期身体障害者を対象とする作業療法は、充実した新生活構築を援助するため、身体機能、日常生活機能に特化して行われているが、退院後の社会参加は容易でないとの指摘がある（太田、2010）。一方、作業療法士の間では、集団作業療法の必要性は指摘されている（澤、2010）が、患者の参加経験は明らかにされていない。

本研究で、作業とは作業療法場面の活動より広い範囲の人間が日常的に行う行為を意味する。

目的：回復期患者の社会参加を促進するためのペア参加型作業療法における、患者の経験を理解する。

方法：ペア参加型作業療法とは、回復期リハビリテーション入院患者と担当作業療法士のペア（通常 10～15 組）がゲーム、調理、クラフト、買い物、園芸、合唱などの活動のひとつに参加する作業療法を指す。

研究方法：参加型作業療法における患者と作業療法士の経験を研究するために、参加観察、個別インタビュー、作業療法士のフォーカスグループを実施した。インタビューに応じた作業療法士は、18 名、患者は 21 名だった。インタビューで収集したデータをもとに逐語録を作成し、Mattingly（2000）を参考にナラティブ分析を用いて解釈した。今回の発表では、患者の経験の解釈から明らかになったことを発表する。本研究は所属機関の倫理審査で承認された。

結果と考察：

1. 実施と気づき：患者は障害を持って以来、日常生活でどのくらい自分ができるか実感できず、不安を持っている。ペア参加型作業療法に参加して、日常的な作業に実際に従事することを通して、自分が環境をコントロール（できる）程度に気づき、それによる喜び、安心、自信を持つ。
2. 他の患者との共有経験：回復期の患者は、孤立した気分で入院生活を送っていることが多い。ペア参加型作業療法で他の患者たちと一緒に作業に参加することを通して、自分と同じように障害によるライフクライシスにある人々と、共感、共有を持ち、喜びを感じ、将来への活力を実感していたことがわかった。共有経験は、前向きな姿勢へと発展し、将来へ橋渡しをする。著しい機能制限がある人も、作業参加を通して、社会的存在となり、他の患者との活発な作業参加を喜ぶことができる。
3. 作業療法士とのペア参加が患者に安心を保証し、障害発生以来経験していなかった作業に居心地良く挑戦することが可能になったと考えられる。

結論：

ペア参加型作業療法の中で障害発生以来経験していなかった作業に参加することが、患者に自分のコントロール程度を気づかせ、自分と同じように障害でライフクライシスにある人々と、共感、共有を持ち、喜びを感じ、将来への活力を実感することがわかった。このような達成を通して、ペア参加型作業療法は、社会参加への移行のための一つの社会参加前訓練として機能した。

文献：

太田仁（2010）．集団リハビリテーションの実際．東京：三輪書店．

Mattingly, C.& Garro,L.C.(2000). Narrative and the Cultural Construction of Illness and Healing. Berkley: University of California Press.

Staffan,J.(2009). Astrid and the Japanese Cherry tree: A reflection on transformation and ccupation,作業科学研究, 3, 14-19.

Oral Presentations II

Pre-Training for Social Participation: Experience of Clients in Recovery Stage

Etsuko Odawara¹⁾, Yaeko Shibata²⁾, Hutoshi Mizobe²⁾, Akiko Tsuda²⁾

1) Seirei Christopher University, 2) Hyogo Sougou Rehabilitation Center

Introduction: Occupational therapy for clients in the recovery stage focuses on physical function and self care skills to promote clients' establishment of fulfilling new lives. After recovery rehabilitation, however, clients have trouble returning to society (Oota, 2010). Occupational therapists have stressed group therapy's positive effects for clients' returning to society (Sawa, 2010) but there is no investigation of clients' experience during group therapy sessions. In this presentation, occupation means human actions in daily life, in a wider range of "doing" rather than therapeutic activities.

Purpose: To understand the client's experience in client-and-therapist paired participation occupational therapy (PPOT) sessions.

Methods: PPOT were sessions in which 10-15 client-and-therapist pairs join in an activity such as playing a game, cooking, shopping, gardening, or singing. We conducted participate observation of PPOT, individual interviewing of clients and therapists, and focus groups of occupational therapists. 18 therapists and 21 clients participated in interviews. We analyzed the transcripts of interview data of clients and therapists using narrative analysis (Mattingly, 2000). This presentation shows a part of that research, the analysis of the experiences of the client participants. This research had IRB approval.

Results and discussion:

1. Practice and awareness: Since the onset of disability, clients were not sure of their ability to control everyday life and were anxious about their futures. Through the practice of daily occupations in PPOT sessions, they realized how much they could control environment even with their body disabled and this resulted in feelings of pleasure and/or safety and/or self confidence.

2. Sharing and empathy with other clients: Clients staying in the hospital during their recovery stage often felt lonely. Participating in activities in PPOT sessions with other clients, they experienced feelings of empathy and sharing with others also facing life crisis brought by disability as they were. Through participation in PPOT sessions, they enjoyed doing things together and realized energy toward their future. The clients' empathy and sharing brought them more positive attitudes and bridges to the future. Through participating in PPOT, clients with severe disabilities could be social beings (Steffan, 2009) and enjoy active participation in occupations with others.

3. Paired participation with their therapists guaranteed safety and security so that the clients could comfortably challenge themselves in occupations unexperienced since their disability onset.

Conclusion: Clients' participation in occupations not experienced since their disability onset promoted their awareness of their ability to control the environment, to have empathy and sharing with other client participants that brought them pleasure and resulted in realizing their energy toward the future. Through these gains the PPOT acted as a form of pre-training for transition to social participation.

Reference:

Oota, H. (2010). Practice in group therapy. Tokyo: Miwashoten.

Mattingly, C. & Garro, L.C. (2000). Narrative and the Cultural Construction of Illness and Healing. Berkley: University of California Press.

Staffan, J. (2009). Astrid and the Japanese Cherry tree: A reflection on transformation and occupation, Japanese Journal of Occupational Science 3, 14-19.

Memo





懇親会のご案内



日時 平成 26 年 11 月 15 日 (土) 18:40~20:40

場所 YIC リハビリテーション大学校

(セミナー会場講堂にて)

参加費 ￥5,000 (当日申込み可)



※山口県の郷土料理地酒を用意しております

※懇親会終了後に「宇部新川駅」までシャトルバスを運行します

楽しい余興もございますので

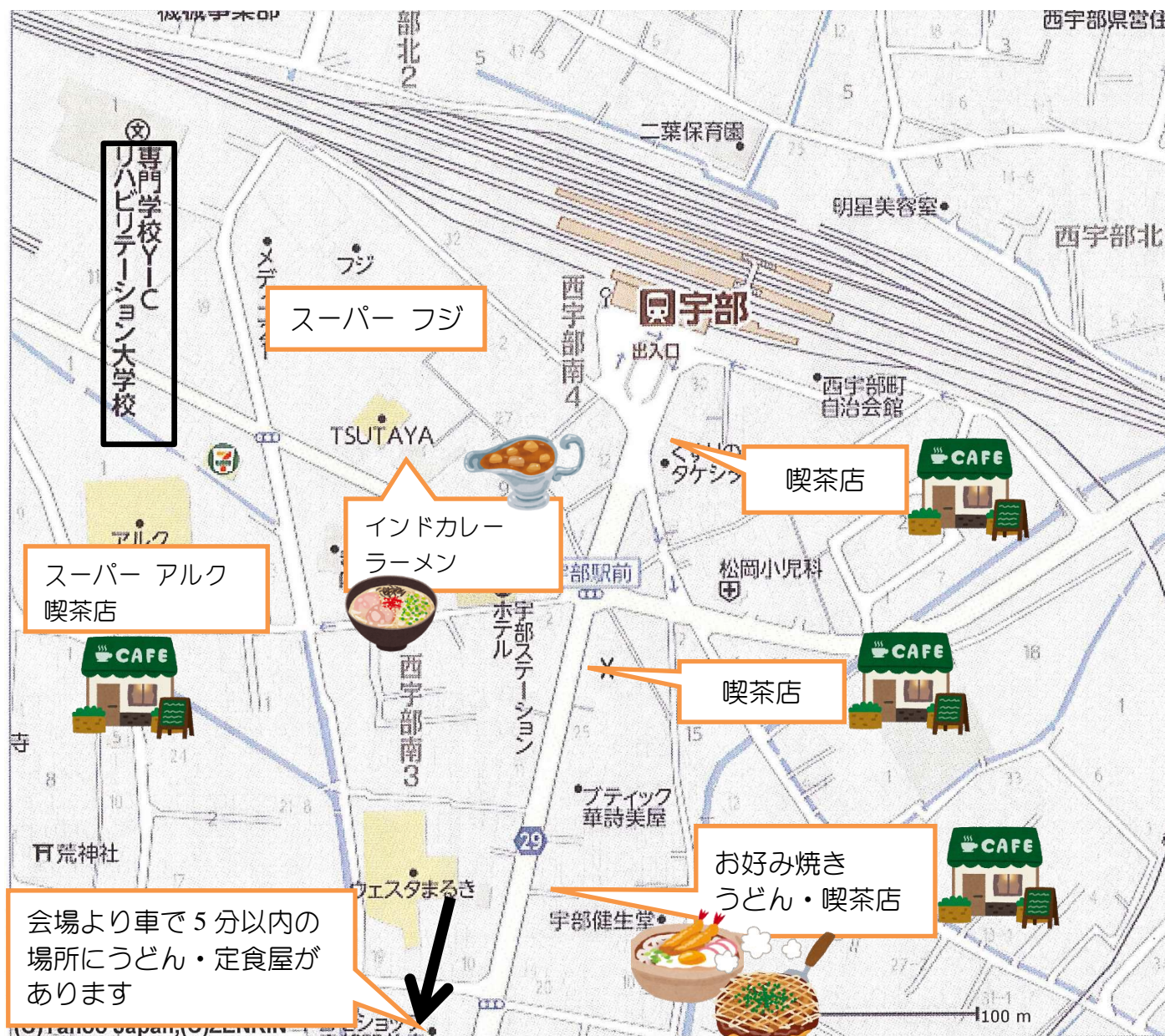


ふるってご参加ください



お笑い講 OS 選手権開催!!!

ランチまっぷ



会場周辺にはスーパー、コンビニが徒歩3分以内の場所に数店あります。
 飲食店はマップにあるように数店しかございません。
 マップにあるお好み焼き、うどん店は会場より徒歩10分以内の場所にあります。

告 広

廣告

廣告

山口・作業維新の会

この名前の意味は

- ①作業科学を勉強することで、作業という言葉の持つ意味を手段的なものだけでなく、目的的なものへと視点の変換を求める、という意味の維新
 - ②現在の作業療法を再考し、今よりもより良い作業療法をクライアントに提供する、という意味の維新
 - ③色んなOTとディスカッションすることで色んな気付きを促し、自分自身の中の作業療法を改革していく、という意味の維新
 - ④作業科学の知識を作業療法へ応用する、という意味の維新
 - ⑤作業科学の知識を世に産み出す、という意味の維新
- です。

作業の機能・形態・意味を 一緒に勉強しませんか？



代表：渡辺 慎介

専門学校 YIC リハビリテーション大学校

作業療法学科

E-mail : s-wnabe@yic.ac.jp

教員室直通 [TEL:0836-45-1136](tel:0836-45-1136)

FAX:0836-45-1135



勉強会
開催中!!

第 18 回作業科学セミナー実行委員

実行委員長	渡辺 慎介	(YIC リハビリテーション大学校)
副実行委員長	池尻 奈美	(介護老人保健施設サンライズ壱岐)
監事		
運営部	高岡 昌平	(阿知須共立病院)
	山下 久美子	(防府幸楽苑) ※イラスト作成
財務部	中嶋 克行	(介護老人保健施設寿光園)
	山田 摩耶	(宇部西リハビリテーション病院)
広報部	齋藤 隆一	(下関市立豊浦病院)
	橋本 章	(徳山リハビリテーション病院)
総務部	田中 陽子	(徳山リハビリテーション病院)
	村田 梨恵	(徳山リハビリテーション病院)
学術部	内田 亜紀	(山口県立総合医療センター)
	御書 正宏	(周南リハビリテーション病院)
顧問理事	近藤 知子	(帝京科学大学)



Special Thanks : YIC リハビリテーション大学校 学生一同



第 18 回作業科学セミナープログラム抄録集

発行日	2014 年 11 月 8 日
発行者	第 18 回作業科学セミナー
日本作業科学研究会会長	港 美雪
研究会事務局	古山 千佳子・坂上 真理
印刷／製本	児玉印刷株式会社

おいでませ

山口へ!!



第 18 回作業科学セミナー

開催日：平成 26 年 11 月 15 日（土） 11 月 16 日（日）

会 場：YIC リハビリテーション大学校

主 催：日本作業科学研究会

後 援：山口県作業療法士会

宇部市